

新たな「兵庫県立人と自然の博物館」 基本構想

門巻三

はじめに ～人と自然の新しい関係の構築～

考えてみると、十九世紀までの世界は幸せであったかもしれない。先進国は自国の中で足りない物があれば、海外であれ陸続きであれ、出かけて行って、それを手にいれた。現地の人たちも、その物資が自分たちの生活に必要なでなければ、妙なものを欲しがる人間がいる、と好奇の目で見ていればよかった。しかし段々、世知辛くなって、外来者と原住民の間に支配関係ができて、植民地だ、帝国だのができて、憎しみと戦いが起きた。

二十世紀になると戦いは先進国と植民地や植民地になりそうな土地の人の争いではなくて、先進国同士の縄張り争いになって、その戦いは二度の悲惨な大戦になった。

かつては地球は無限に人の欲望を満たしてくれる存在だ、と漠然と考えられていたものが、今や、限られた空間、物資、そして自然の中で、六十億の人類が生きなければならなくなったのである。中国とインドを合わせただけでも人口は二十億になるだろう。彼らが今の日本のような先進国並みの物資を要求するようになった時、地球と自然はそれに答えられるであろうか。

現在の私たちは、新しく自然を見直さねばならなくなっている。どのような形で、人は自然と共存できるか、地球を荒廃させて、それと共に人類も滅亡する悲劇を避けるためにも、自然との付き合い方を考えなおさねばならないのが、現実の課題なのである。

「人と自然の博物館」はそのような今日的な問題を考えるための、先駆的な博物館である。幸い、兵庫県は日本海岸と中部の山岳地帯、そして瀬戸内海岸という三つの特色ある土地も持っている。このように条件の違う自然の土地を持ち、海外との接触の深いこの土地は、世界のさまざまな自然の状況と、そこに生きる人々の諸相を理解し、地球の今日的課題の深刻さを知ることができよう。

この博物館は兵庫県の設立であるが、やがてここが日本全国の人と自然とのかかわりを考える一大拠点となることを、私は期待したいし、古い歴史と、その中で育った文化を持つ兵庫県であるからこそ、その試みが成功することを、私は確信している。

私はこの問題については、多くの県民と同じく、一介の素人でしかないが、博物館の企画会議に列席することができて、多くの専門家から、有益な知識と多くの問題を教えられたことを、幸せで名誉なことであった、と思っている。

三浦朱門

はじめに

目次

第1章 <ひとはく>を取り巻く状況—県民が県土（自然・環境・文化）を支える新しい世紀

1-1 これからの社会における博物館の役割

- (1) 人と自然、時代の潮流
- (2) 人と自然の関わりの変化
- (3) 美しいひょうご(人と自然・環境・文化)と新しいライフスタイルを支える「学び」
- (4) 新しい博物館の役割
- (5) 行財政改革の中での県立博物館

1-2 これまでの歩みと課題

第2章 めざすべき将来像—美しいひょうごを県民みんなとつくる生涯学習院

2-1 将来像

- (1) 真の生涯学習を実現する博物館—生涯学習院
- (2) 県民が活動・交流するステージとしての博物館
- (3) ひょうごの自然・環境を未来に継承する学習コアとしての博物館
- (4) 県政課題解決のための知的創造インフラとしての博物館

2-2 生涯にわたる学びのパートナーとしての生涯学習院—ひょうごの生涯学習の将来像

- (1) 生涯学習のグランドビジョン
- (2) 生涯学習の実現方向—生涯学習院の構築
- (3) 美しいひょうごの実現—期待される効果

第3章 将来像実現のためのソフト・ハードのあり方—展示から演示（参画と協働の展示）へ

3-1 「これまで」と「これから」のひとはくの事業展開

- (1) 新しい学びの仕組みの構築
- (2) ひとはく生涯学習院の学習空間の役割
- (3) ソフト・ハードの融合“演示”と劇場博物館
- (4) 学習層に対応したプログラムと空間の提供

3-2 新館の“演示”空間

- (1) 驚きの交流空間と連鎖参加型“演示”
- (2) 自ら学べる空間となりきり型“演示”
- (3) 分かり合う空間と担い手実演型“演示”
- (4) “演示”の中身になる博物館活動のプログラム例と空間の対応

3-3 本館と新館の機能

第4章 生涯学習院の運営計画

4-1 運営の基本方針

4-2 組織のあり方

4-3 組織移行の考え方

第5章 構想の実現に向けて

参考資料

- 1 人と自然の博物館 基本構想策定委員会 委員名簿
- 2 委員会の審議経過
- 3 用語集

第1章 <ひとはく>を取り巻く状況—県民が県土（自然・環境・文化）を支える新しい世紀

1-1 これからの社会における博物館の役割

(1) 人と自然、時代の潮流

人は自然のなかで誕生し、今も自然のなかで生きている。ヒトが人となったとき、人は文明という衣をまとうようになった。この衣はヒトと自然のつきあい方だけでなく、人と人とのつながりを含めた文化を内包するものであり、人のこころをささえるものとなった。実はつい最近まで、この衣は比較的薄いものであった。おかげで人は自然をその体全体で感じながら、自然に依存し、時には自然に苦しめられて生活してきた。

しかし、近年、文明の衣はずいぶん厚いものになった。現代の人は自然のありがたみも、おそろしさも、ときおり感じるだけで生活できるようになった。その分、自然は人にとって遠いものとなった。また、自然とのかかわりのなかで育まれてきた、人のこころは危機に陥っている。

文明の衣が厚くなった今、人は頭で自然のことを理解すると同時に、意識的に五感を駆使して自然を感じなくてはならない時期にきている。私たちは、なにかをやろうとすると、まず、人と自然のあり方を考えてから始めなくてはならない時代にさしかかっているのである。このことは、人類全体から個人まであらゆるレベルのコミュニティについていえることである。人々があらためて総合的に、自然を知り、人と自然の関係・人と人とのつながりの重要性を理解・尊重し、考え、再構築するとき、はじめて、心豊かで未来に希望がもてる社会をつくることができる。そのとき、人と自然のあり方を考えることは、人にとってごく基本的な要素であり、それをわきまえて行動することが不可欠の作法と感じられるようになる。いいかえれば、そのとき、人と自然のあり方についての理解が、教養として尊重される時代が到来する。

(2) 人と自然の関わりの変化

■ライフスタイルの変化

20世紀のライフスタイルの変化（便利な社会と物質的に豊かな生活の享受）は、日本人の生活を支えてきた「自然との密接な関係」の基盤を崩すという結果をもたらすことになった。都市住民の自然離れに加え、多自然居住地域においてでさえ、生業の機械化・暮らしの都市化を通じて自然との密接なかわりが失われつつある。このことは「ライフスタイルの変化による生業の崩壊*」と捉えることができる。

■都市化と多自然居住地域の崩壊

都市への人口流出・農山村の過疎化・高齢化は集落そのものを崩壊させ、林業・水田耕作など生業を通して国土の保全にも大いに寄与してきた里山や田畑など人がつくってきた豊かな自然が失われるという危機的な結果をもたらそうとしている。この事態を放置することは、当然ながら、将来的な食糧確保・国土保全・こころの安寧に危機をもたらすことにつながる。また、環境面では、すでに国民の環境リテラシーの低下となって表れており、現に「生物生息地の破壊*」や「外来種問題*」が国家的に解決すべき緊急の課題になっている。

*環境省：生物多様性国家戦略でとりあげられた3つの危機：参考文献1

■ひょうごの自然と生活

兵庫県は、瀬戸内から日本海、そして淡路島にいたる広い領域のなかには、ブナ林から照葉樹林、そして人手の加わった里山などの多様な森が存在し、性格の異なった2つの海が人々に豊かな資源を提供してくれていることから、「日本の縮図」と形容される。また、これらの森を大河川が貫き、豊かで多様な自然環境を形成している。

一方、兵庫県は国内の他府県とは地質・生物学的そして文化的に異なった個性をもった地域でもある。もともと5つの国が合わさった地域であり、それぞれの地域は個性をもった豊かな自然と文化を有している。兵庫県の特性はこの異なった5国の総体であると言える。この多様で豊かな自然と文化は後世に受け継がれるべき価値をもった重要な財産である。

■ニュータウンの登場

戦後の経済成長にあわせるように、都市住民が都市そのものではなく、郊外地区に居住するニュータウン（NT）開発が盛んに行われた。これらのNTは、大阪を中心とする近畿圏においては、早期には千里NTや泉北NTなどが大都市の近郊緑地の内側につくられたが、兵庫県ではその外側にあたる自然公園地域（ここでいう農山村地域）につくられることとなった。これは日本全体でおこっている現象であり、少子高齢化に伴うNT人口の減少など課題も多いが、農村と都市がすぐそばに隣接しているという条件は都市と農村の交流による「新たなライフスタイル」が構築できる可能性をもつことを意味する。



図 1-1 兵庫の自然と居住地の分布

今後、都市と農村はどのようにして新しい里山を作っていくのか、都市と自然はどう関係すべきか。そんなことを総合学習のテーマにしてもらいたい。(三浦朱門委員長)

兵庫県における自然の特殊性を検討資料に明記していただきたい。～(中略)～日本の縮図で活躍しているひとはくであればこそ、他府県の博物館の手本になることができるのである。(山内康弘委員)

(3) 自然・環境（美しいひょうご）と新しいライフスタイルを支える「学び」

■環境と経済の好循環

人と自然の密接なかかわり、これを支える人と人のつながりを、再現し創出できる「新たなライフスタイル」を国民全体で参画と協働により構築することが今、緊急の課題である。この課題は、国民の生活に深く関わる経済活動をともなったリアリティのある方策「環境と経済の好循環」によって解決されるべきものである。（参考文献2）。

＜環境と経済の好循環ビジョン～健やかで美しく豊かな環境先進国へ向けて～＞

（中央環境審議会・平成16年4月）

「地球環境と人間活動が共生する持続可能な社会の実現に向かおうとする時に、経済だけ、環境だけを別々にとらえて追及しては、壁に突き当たります。環境と経済の好循環を実現するためには、皆がともに努力すれば実現する理想の将来像を描き、互いに信頼感を持って、生活者、教育者、事業者、行政関係者など、それぞれの立場で、役割を分担しながら社会的責任を誠実に果たしつつ努力していく必要があります」

■多様なステークホルダーの協働

自然・環境を保全・創造できる「新たなライフスタイル」の創出にあたっては、多様なステークホルダー間の密接な協働が必要となる。この協働を生み出すためには、立場・利害の異なったステークホルダー達が身の回りの自然・環境に関する教養を持ち、まずは自らの立場から新たな行動を提案し、その上で論議のなかで互いの理解を深め、調整し、（施策として）実行していくというプロセスが必要である。この実現のために、現在の自然・環境を正しく理解し、自らの好奇心を元に持続的な学習をし、日常的に地域の自然・環境に関わるといった「自然・環境に関する新しい生涯学習システム」が成熟社会の社会基盤として必要不可欠である。

■社会基盤としての生涯学習システムの必要性

この自然・環境に関する新しい生涯学習システムが社会基盤として整備されれば、農林業にこれから携わる若い人材の養成はむろんのこと、生産の場としてだけでなく環境創出の場・地域環境学習の場、新たな観光の場として、経済的に成り立つ形で山林や農地を保全していくといった方策が、向上された環境リテラシーの元で実現につながりうる。また、生涯学習活動の一環として都市と農山村が積極的に交流するといった新たなライフスタイルが地域運営の核となり、地域の風土・文化を伝承する力ともなる（参考文献3）。

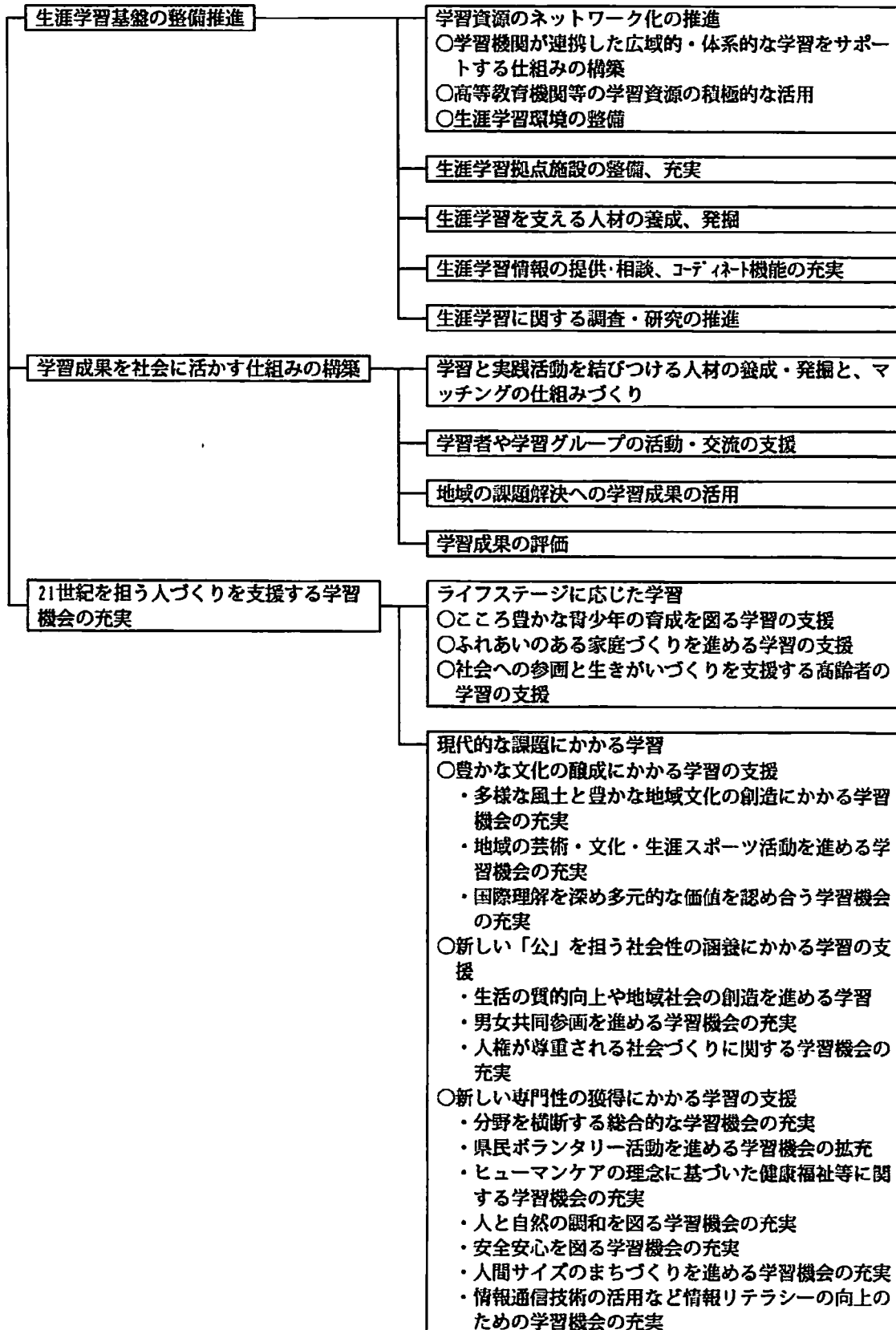


図 1-2 兵庫県における生涯学習の推進課題とその方策

■人と自然の共生を支える「参画と協働」

物質中心主義の 20 世紀を終えた今、地域環境主義と言える「人と自然の共生」を考える時代にさしかかった。生物多様性の保全や地域生態系の保全、外来種対策と言ったグローバルな自然・環境課題を解決することが求められ、その方策として地方自治体が成熟した環境優先社会を実現すべく「参画と協働」を元に各種施策を推進している。すなわち、個を確立したステークホルダー群によって地域環境を支えようと言う取り組みである。この取り組みの実現のためにも、自然・環境に関する新しい生涯学習システムは必要不可欠である。

■少子高齢社会と新しいステークホルダー

21 世紀のステークホルダーを考えるにあたって重要な要因は、少子高齢社会の到来である。2007 年からおこる団塊世代の退職や、(欧米と違って)その後四半世紀続く高齢者中心の人口構成は、上記の危機の克服にこれら高齢者が大いに貢献できる可能性を提起する。それは、農山村地域において衰退しつつある人と自然のかかわりに関する文化を、高齢者が生業以外の方法(たとえば、遊び・楽しみ)でも次世代(子ども)に継承することで可能になるような地域・環境マネジメントである。ここでも、多様なステークホルダーの自然・環境に関する生涯学習と、それに基づく協働が不可欠であることはいままでもない。また、高齢人口のみならず、近年定着したボランティア活動や地域貢献、社会人のリカレント教育による教養・技術の多様化・高度化、企業の社会貢献とそのための研修機会の増加、総合的な理解力・応用力を高める学校教育以外の学習など、様々な立場や世代のステークホルダーが新しいライフスタイルを模索し、実現できる社会になってきたと言えよう。(参考文献 4)。

20 世紀までの博物館は宝物を大切に保管して来館者に見せるということをしてきた。これからの博物館は、利用者に考えてもらい、参加してもらうことが求められる。(三浦朱門委員長)

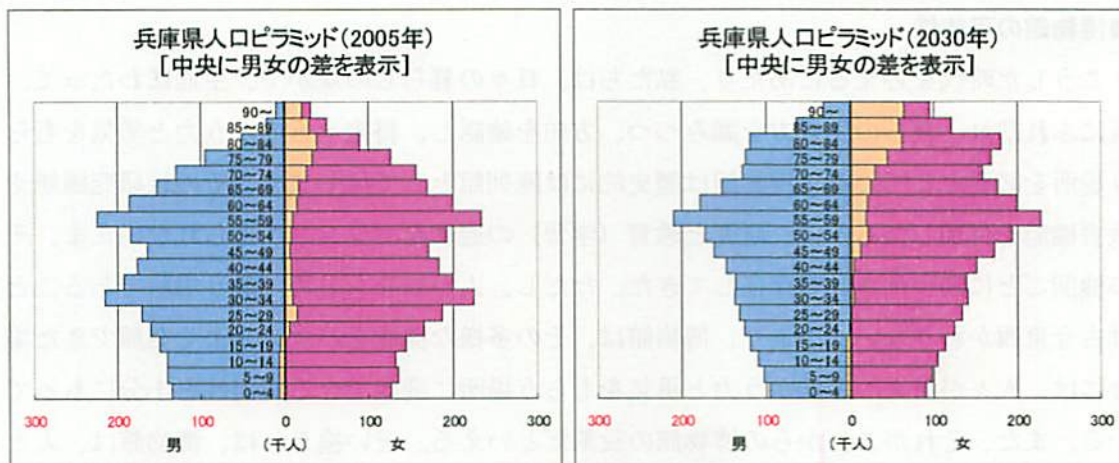


図1-3 2005-2030年の兵庫県の人口ピラミッドの変化(人口減少社会の展望(兵庫県))

表1-1 人口減少社会の課題に対する各主体の役割

主体(役割)	ライフスタイル側面	空間・環境側面	社会・経済側面
住民・生活者	<ul style="list-style-type: none"> ・気楽に参加できる緩やかなコミュニティの形成 ・活動主体として地域に参画(特に高齢者層) 	<ul style="list-style-type: none"> ・新たな集住形態の模索 ・足による投票(居住地の主眼的選択) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ITリテラシーの向上 ・多文化共生を当たり前とする意識の変革
団体・NPO	<ul style="list-style-type: none"> ・地域のマネジメント支援 	<ul style="list-style-type: none"> ・集落衰退に対する支援ネットワーク構築 	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニティビジネスの拡大
企業・事業者	<ul style="list-style-type: none"> ・女性・高齢者の雇用 ・若者の雇用流動化に対する支援 	<ul style="list-style-type: none"> ・空間管理ビジネスの創出 ・ゴミの資源化等産業のグリーン化 	<ul style="list-style-type: none"> ・緩やかな雇用形態の創出 ・国際競争の激化・生産性の向上
行政	<ul style="list-style-type: none"> ・要介護高齢者の増加への対応 ・中山間地域での保健医療サービス提供 ・学校と地域の接続 	<ul style="list-style-type: none"> ・地方部の交通ネットワークの維持 ・社会資本整備のソフト化 ・空間管理の仕組みの構築 	<ul style="list-style-type: none"> ・財政の硬直化に対する対応(小さな政府化) ・地域特性に応じたセーフティネットの構築

(4) 新しい博物館の役割

■博物館の可能性

こうした時代を迎えるにあたり、私たちは、日々の暮らしのなかで、生涯にわたって、折にふれ訪れ、自らの生き方を顧みつつ、方向を確認し、将来へと向かう力と勇気をもらう場所を必要としている。博物館は歴史的には陳列館としてはじまり、その後研究機能や教育機能を付加したものの、研究と教育（学習）の適切なバランスがとられないまま、その機関ごとに矮小化されて存在してきた。ただし、人が知をもとめて集う場所であることは古今東西かわりない。つまり、博物館は、その多様な機能をバランスよく発揮できた場合には、人々が将来へと向かう力と勇気をもらう場所に変貌できる可能性を十分にもっている。また、それがこれからの博物館の役割だといえる。言い換えれば、博物館は、人と自然のあり方を、子どもたちが、現代人としての素養として身につける場所であり、大人が、仕事を通じ、あるいは日々の生活のなかで、自分の存在を折にふれ確認する場所であり、高齢者が、生きがいを感じつつ学ぶ場所である。つまり、人と自然のあり方を、生涯を通じて、日々呼吸するように学ぶ場所、夢と好奇心に満ちた場所。これからの博物館はそういった場所となる。少子高齢化社会が進む中、高齢者が生き生きと学ぶことができる場、高齢者がこれまで育んできた知恵や新たに学んだ事柄を次世代に伝えていく場が必要である。博物館は高齢者から子どもまでが集い、人と人の間で知の交流がおこなわれ、その交流を積極的に支援する場、つまり新たな生涯学習が効果的におこなえる場となる。

■「人と自然学」と「展望塔」

博物館が人と自然のあり方についての新しい生涯学習施設になるためには、基盤となる思想と哲学、これらを構築する研究が必要である。これを「人と自然学」と呼ぶことにする。人と自然学は、自然に関する理解はもちろんのこと、人と自然の過去から現在に至る歴史的なつながり、それを支える人と人のつながりの理解、そしてそれらをふまえて、経済と環境が両立する環境優先社会にむけた行動計画を提案する新たな学である。地域の自然、そして人とのつながりが多様であることから、人と自然学は、その基盤を地域研究におく。ここでいう地域研究とは、日本全体、否世界を視野にいれて、そのなかで地域の特性を見出し、地域の未来を提案しようとするものである。また、人と自然学は「分析的な枚挙の学」ではなく「統合的な関係学」でなくてはならない。そのためには自然・環境系のみならず人文系の大学や生涯学習施設が研究面、普及・啓発活動面、人材育成面から連携する必要があり、博物館は全ての学際と行動のための学習・交流拠点になる。

博物館は多様な人が集い・交流する場所であり、多種多様な研究者が集まり、地域の分野横断的・総合的な資料と情報をもとに、県民と研究者が共に研究できる場所である。人と自然学の成果をもとに、人と自然に関する新たな思想と哲学を構築し、人々とともに、

地域を眺め、理解し、行動するとき、博物館は、自然と社会を広く眺望し、考え、行動する「展望塔」としての社会的役割を果たすことができる（参考文献5）。

■共に考え学び合う仕組み

博物館は、展望塔として得た研究成果を、展示やセミナー、地域でのシンクタンク活動、人材養成など多様なプログラムを通して県民に還元できる機能を併せ持っている。展示を見ることや自身で体験してみることによって、知識を具体的なビジョンとして理解でき、地域でのさらなる生涯学習の機会を拡大させることができる。また、学んだことを他者に伝えることも学習プロセスである。展示、セミナー、シンクタンク、資料収集、研究などあらゆる博物館活動を学習した県民が一部担い、共に考え学ぶ仕組みを作ることは、参画と協働に基づいた生涯学習システムの構築につながる。

■広義の「生涯学習」への対応

従来の生涯学習の概念は、高齢者学習、文化セミナー受講など限定されたイメージがあるため、ここで概念を整理する。

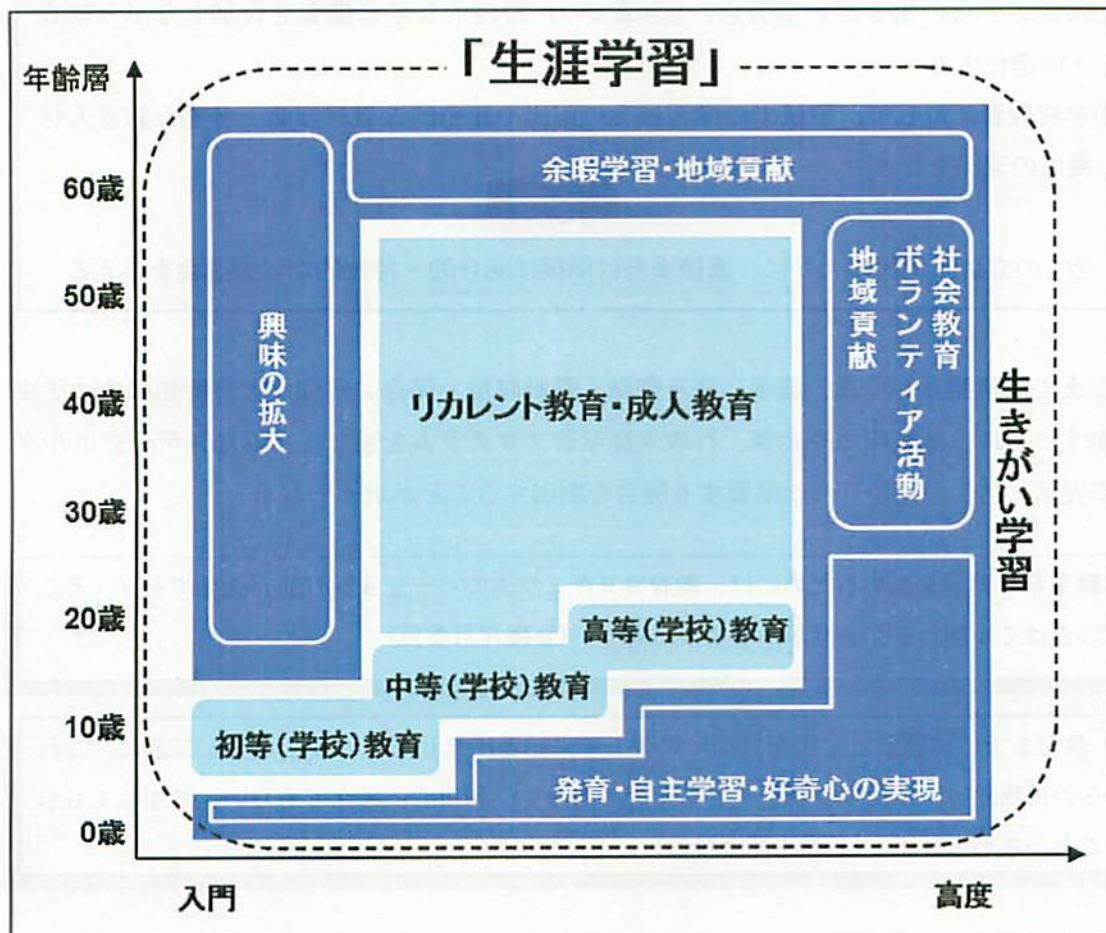


図1-4 多様なステークホルダーが地域の自然・環境を支えるために必要な生涯学習

人は日々の暮らしの中で不断に何かを学びとっているものであり、生涯にわたって学ぶ存在こそが人であるといえよう。新しい生涯学習の概念は、この幼児期から老年期までの生涯にわたる学びを広く意味し、年齢や境遇などによってさまざまな形式をもつ学習過程をすべて包含するものと捉えたい。この考え方に立てば、学校教育は生涯学習と別個に存在するのではなく、幼児期から成年期に至るまでの過程において制度化された生涯学習の一部ととらえるべきことになる。

このように人の一生にわたる学習を連続的にとらえることにより、生涯学習の過程において博物館が担うべき役割はより明確になる。博物館は、「受精卵から墓場まで」（岩槻邦男館長）の人の生涯の長さにわたってさまざまな関わりをもつことができる潜在力を秘めた存在なのであり、ここに博物館が目指すべき生涯学習の姿がある。

■博物館が担う生涯学習機関としての役割

この生涯学習の整理を元にするると、新しい博物館が担う生涯学習機関としての役割は、大きくは以下のようなになる。

- ①機会が少ない生きがい学習を、(地域での) 持続的な学習機会を付加しながら総合化・構造化する
 - ②学校教育に対して、地域での学習機会の創出や総合的な教材開発、多様な教育人材の養成の支援を行う
-
- 全ての立場、世代の人々に、直接または間接に総合的・持続的な学習機会を与える

加えて博物館としては、展示、普及啓発、資料収集・保存、研究など博物館の持つ従来機能すべてに、地域住民や企業、行政生涯学習プログラムを通して多様なステークホルダーや児童・学生が関わりつつ学習する機会を創出することが求められる。

体験学習の効果を高めるためには、教育カリキュラムのバージョンUPが大切であり、そこにひとはくが関わる必要があるように思う。(岩槻邦男委員)

20 世紀までの博物館は宝物を大切に保管して来館者に見せるということをしてきた。これからの博物館は、単に展示物を見せるだけではなく、利用者に考えてもらい、参加してもらうことが求められる。(三浦朱門委員長)

(5) 行財政改革の中での県立博物館

■行財政改革と人材活用

国の三位一体改革を始めとした構造改革の具体化に対処しつつ、限られた財源の効率的な運用が求められている。そのために、臨時的または時限的な行政課題に柔軟かつ効率的に対処すべく、タスクフォースやプロジェクトチームなどの活用が施行されている。県政においても、ひょうごキャリアアッププログラムや任期付き職員制度の効果的な活用、再任用制度などによって公務部門のワークシェアリングが計画されている。博物館でも外部人材の導入を検討するとともに、外部機関の効率化に資する「新しい公」を担う専門的な人材養成を強化する必要がある（参考文献6）。

■試験研究機関との連携

博物館と専門分野を近しくする試験研究機関については、平成12年の見直しの方向性をふまえ、①県民や企業のニーズに直結した研究や成果発の普及啓発、②県民・団体のコーディネートや情報提供、相談体制の強化、③研究マネジメント機能・体制の強化について、専門分野の網羅と研究協力、成果の普及啓発機能を博物館が担うなど、全県レベルで連携をすすめる必要がある（参考文献7・8）。

■効率的・効果的な経営手法

また公共施設として効率的、効果的な経営手法を導入することも求められている。PFIなど民間参画型の施設運営やVE（バリューエンジニアリング）手法の拡充、施設運営の全体的・部分的アウトソーシングも検討する必要があり、将来的には指定管理者や独立行政法人化なども視野にいれておく必要がある。また、災害復興や県土のリ・デザイン、里地・里山整備や野生動物との共生方策など、従来組織では即時対応しづらい緊急課題について柔軟に対応できるシンクタンク体制が求められる。

■全県規模の効率的・効果的運営の支援

財政的な改革・措置のみでは、博物館機能の効率化はできても効果的な運用は低下する恐れもある。県立ひとにはくには、単館での効率的・効果的な運営と共に、県下の博物館（相当施設）に対して人材・情報・展示資料のセンター機能を担い、全県の生涯学習性能を向上させる効果的な事業を推進することが求められる（参考文献3）。

博物館運営に関係する行財政改革

経営面における改革

- <組織>
 - ・タスクフォースやプロジェクトチームなどの活用
- <人材>
 - ・ワークショップの実施（教育部門における減員見込み数：230人）
 - ・非常勤嘱託員や臨時職員等の活用
- <効率的な経営手法の導入>
 - ・民間参加型の施設運営…PFI手法の活用等を検討
 - ・VE（バリューエンジニアリング）手法等の拡充
 - ・アウトソーシングの推進（兵庫陶芸美術館、文化会館等の維持管理など）
 - ・指定管理者制度への移行
- <新たな公務員制度の構築>

他の施設の動向

- <試験教育機関のあり方>
 - ・研究評価システム等を活用し、重点化の方向に沿った業務の見直しやマネジメント機能の強化等を行う
 - ・機動的な予算制度、人材の活性化など、各試験研究機関の業務の特性に応じた効率的・効果的な業務運営のあり方等について検討す

博物館が施策に貢献できる項目

県民緑税（仮称）の導入

- <森林整備>
 - ・公益的機能が十分発揮される災害に強い森林の整備等に向け、防災林整備、針葉樹林の混交化、集落裏山などの自主防災の森づくりや、野生動物との共生を目指す森づくりの事業を推進
- <都市の緑化>
 - ・緑のネットワークの形成に向け、県民が行う都市の防災性の向上や環境の改善等を目的とした質の高い緑地整備に対して支援する県

先行取得用地の活用

本格的な事業化に向け、事業目的の見直しも含めた幅広い利活用の検討を行うほか、本格的な事業化までの間、用地の特性を活かし、里山林整備等による有効活用の促進を図る

新規施策分野への取り組み

- ・安全と安心の確保 阪神・淡路大震災復興フォローアップの推進
 - 台風 23 号等一連の風水害への適切な対応
- ・防災対策の推進
 - 子ども・家庭対策の充実、兵庫教育の充実

図 1-5 博物館を取り巻く行財政改革

1-2 これまでの実績と課題

(1) これまでの実績

■資料・情報の集積と研究

ひとはくはこれまで、兵庫県内のみならず、日本全国・世界の標本資料を収集してきた。収蔵資料総数は100万点以上におよんでいる。また、県内の自然環境情報を収集・データベース化するとともに、地理情報システム(GIS)を利用した保全研究、およびその活用を進めてきた。これらのデータのなかには調査によるものの他、県民からの情報提供、リサーチプロジェクトのような県民参画型調査によって得られた情報も含まれており、「参画と協働」の理念のもとに資料・情報収集と研究を行ってきた。これらのデータは行政機関への情報提供、県職員研修実施といった形でも活用している。研究成果は論文・著書として中期目標を上回る形で発表されている。また、ジーンファームにおいては、生物多様性保全の観点から野生植物の保全を目的した「ジーンバンク事業」を実施してきた。特に絶滅危惧植物の系統保存、増殖、緊急避難と自生地の保全・復元、新たな生育地の創出などを進めている。

<これまでの実績>

・資料収集(コレクションの受け入れ) 54件/3年 ・研究活動(論文等) 501本/3年

■シンクタンク事業

ひとはくは、研究を Science for Society として行ってきた。その表れが、河川の自然再生・里地里山保全・ワイルドライフマネジメント・外来種問題などにおけるシンクタンク活動である。県の行政組織とタイアップしながら、研究を進め、その成果を施策として提言し、その効果を検証し、再度研究計画を練るというアダプティブマネジメントの手法をもちいて行政、ひいては県民に貢献してきた。このことが、今後ひとはくが果たすべき中間支援機能・コーディネート機能の基盤となる。

<これまでの実績>

・シンクタンク活動 1182件/3年

■博物館の新展開 —運営改革とキャラバン事業、生涯学習—

ひとはくは、平成12年度に策定した「ひとはくの新展開」によって、副館長と経営戦略会議の設置、研究員の研究部と事業部の兼務、タスクフォース型のプロジェクト設置などの運営改革を推進してきた。

事業面では、セミナーを中心とする生涯学習事業を充実させるとともに、兵庫県の各地域に館員がかけ、地域で地域住民とともに生涯学習を実践するキャラバン事業を平成14年から展開してきた。平成15年度からは、学校を拠点とした「学校が博物館」やスクールパートナープログラム等において学校との連携事業を進めてきている。このキャラバン事業によって、これまで50箇所以上の地域の人々と face to face で交流し、自然・環境に限らない、地域の文化や歴史を活用した地域展開を始動させることができた。また、平成16年からは、地域で自律的に活動できる地域研究員の養成事業を開始している。

<これまでの実績>

・セミナー開催 300件/年 ・キャラバン開催 51件/3年
・地域研究員養成 80人/2年 ・連携団体 50件/年

表1-2 「ひととはくの新展開」の中間目標（実績）

1. 生涯学習への支援 県民個々のニーズにきめ細かく対応するパーソナルサポートへ

〈担い手の養成〉 - 「学習」から「実践」までをサポートするソフトの提供

	中期目標	指標	指標の目標値	H15年度 データ	H16年度 データ
1.1	県民ニーズに即した段階的・連続的な学習プログラムを提供し、新規参加者を開拓するとともに、再参加を促進し、参加者数および参加者の層を拡大する	学習プログラム参加者の総数	18年度までにのべ25,000人	5,131人 (セミナーのみ)	5,087人 (セミナーのみ)
		学習プログラム参加者のひろがり	全県民局管轄地域から参加者獲得、全年齢層から参加者獲得	全地域・年齢層から参加者獲得 96%達成	全地域・年齢層から参加者獲得 97.5%達成
1.2	県下各地域において、県民と館とが参画と協働によって実施する参画・協働型プログラムを積極的に企画し、学びの実践を支援する	県民・団体・NPO等との連携による参画・協働型プログラム数	18年度までにのべ150件	114件	82件

〈県民ニーズに応えた学習の場の提供〉 - 魅力ある空間づくり・実践フィールドの提供

	中期目標	指標	指標の目標値	H15年度 データ	H16年度 データ
1.3	展示の質の向上、レファレンスの充実等によって、魅力ある空間づくりの観点から館の機能を充実させる	ビジター数	250,000人/年	262,973人	373,112人
1.4	他施設との連携等により、県下各地に館のサービス提供の場を設け、県民の学習や実践の機会を拡大する	連携施設数	18年度までにのべ10施設	65施設	30施設

2. 自然・環境シンクタンク機能の充実 地域課題への積極的取り組み

〈自然環境情報の一元管理〉 - ひととはくに来ればすべてがわかる

	中期目標	指標	指標の目標値	H15年度 データ	H16年度 データ
2.1	収蔵資料等の電子化を進めるとともに、家庭、職場、学校等館外にあっても必要な情報をネットワークで活用できる情報システムの整備を図り、電子化された情報の効果的な利活用を促進する	電子情報の利活用件数	18年度までにのべ35万アクセス	518,983アクセス	482,003アクセス
2.2	収蔵資料及び関連情報を広く一般に提供するとともに、より専門的な学習、調査研究に資するため、閲覧、貸出等収蔵資料の直接的な利活用を促進する	資料利用者総数	18年度までにのべ5,000人	4,476人	3,774人

〈総合的なシンクタンク事業〉 -ともに考えるコミュニティシンクタンク

	中期目標	指標	指標の目標値	H15年度 データ	H16年度 データ
2.3	地域が抱える人と自然の共生に関する多様な課題に対し、専門的な立場からのアドバイス、情報提供を行う	館員が関与したプロジェクト数	18年度までにのべ1,500件	398件	369件
2.4	県民・NPO・団体等と共に人と自然の共生に資する活動を推進するために、わからないことは博物館に聞く受皿となる仕組みの構築を検討するとともに、その一環として相談しやすい環境・システムを整備する	わからないことは博物館に聞く受皿となる仕組みの有無	18年度までに制度を導入し試験運用開始、以降は本格運用を目指す	—	—
		年間相談件数	18年度までにのべ1,500件	1,962件	1,438件

3. 研究・資料 基礎体力の強化

〈世界～地域の研究・資料を全事業にフィードバックし、効率化・最適化を図る〉

	中期目標	指標	指標の目標値	H15年度 データ	H16年度 データ
3.1	兵庫県の人と自然に関する研究の中核拠点としての水準を保ちつつ、博物館として常に魅力的なテーマの研究を遂行する	学術論文著書数	学術誌等掲載論文および専門著書数 40本/年	65本	65本
3.2	兵庫県の人と自然に関する地域特性の解明、課題の解決、魅力づくりに貢献する研究を推進する	県政課題、地域課題に関連した論文著書・総説 その他件数	80件/年	109件	109件
		一般向け著書・総説その他数	一般向け著書総説数120件/年	97件	84件

〈世界レベルの博物館へ、飛躍の5年間〉

	中期目標	指標	指標の目標値	H15年度 データ	H16年度 データ
3.3	わが国有数の博物館として、広く県民の期待に応えるために、特色ある質の高い資料を収集する	県内外のコレクションの受け入れ	18年度までにのべ100件受け入れ	19件	24件
3.4	ふるさと兵庫の人と自然に関する資料を積極的に収集し、県民共有の財産を継承する中核拠点としての機能を確固たるものとする	兵庫県版レッドデータブック掲載種及び掲載箇所に関する資料の収集数	18年度までにレッドデータブック掲載の種・箇所の80%に関する資料収集	64.40%	40% (レッドデータブック改定による)

4. マーケティングおよびマネジメント 健全で効率的な経営

〈すべての県民に知られ利用される博物館〉

	中期目標	指標	指標の目標値	H15年度 データ	H16年度 データ
4.1	広く県民の博物館事業への理解を醸成するとともに、博物館を活用する気運を拡大する	知名度の向上	平成18年度に知名度50%（県民の半数が知っている）	—	—

〈柔軟で活力を生み出す開かれた博物館運営〉

	中期目標	指標	指標の目標値	H15年度 データ	H16年度 データ
4.2	参画と協働の理念にもとづき、開かれた博物館運営と積極的な情報公開によって博物館運営を透明化すると同時に、より効率化を図り、博物館活動を活性化する	中期目標の達成	目標達成率80%	80%	80%

(2) 課題

■無関心層の学習への誘引

新展開以降、ひとはくは、セミナーの充実・各種イベントの開催等を通じて、自然・環境にあまり関心のない人々を、学習へといざなう活動をおこなってきた。その結果、入館者・各種事業への参加者数は大幅に増加した。しかし、人と自然の関係性がますます疎遠になり、地球温暖化等、自然・環境問題が深刻さを増す中、21世紀の環境優先社会を築くためには、全ての県民がより深く自然・環境に対して意識を高めていくことが求められている。このような中で、ひとはくは、すでに自然・環境に関心を持つ人だけでなく、より多くの県民の自然と環境への関心を喚起し、ひとはくを知ってもらい、生涯学習の輪に入ってもらふ役割を果たす必要がある。そのためには、話題性のある展示、学習のきっかけとしての驚きと感動を与える展示、これらを内包する交流空間が必要である。

■ともに学ぶ

新展開以降、ひとはくは、セミナー・キャラバン等を通じて、県民に学習機会を提供してきた。そのなかで重視してきたのは、研究員が県民に対して一方的に教えるのではなく、ともに学ぶという姿勢である。しかし、現在のひとはくの展示空間は、ともに学ぶ仕掛けができるようになっていない。そういった仕掛けのできる空間が必要である。

■担い手の育成

新展開以降、ひとはくは、キャラバン事業を通じて地域との連携を築き、地域で自律的に活動を行える地域研究員の養成に着手してきた。しかし、地域の担い手を効果的に育成するためには、学習の意欲と効果を高める生涯学習システムとその拠点の整備が必要である。

■交流・連携の拠点の整備

キャラバン事業で築いた地域との連携をさらに太いパイプに、そして全県にわたるネットワークにしたてる工夫が必要である。そのためには、県民が連携し、交流する拠点作りが必要である。

<第1章参考・引用文献>

1. 環境省（2002）：「新・生物多様性国家戦略」
2. 環境省（2004）：「環境と経済の好循環ビジョンー健やかで美しく豊かな環境先進国へ向けて」（中央環境審議会総合政策部会環境と経済の好循環専門委員会報告）
3. 兵庫県県民政策部（2001）「新兵庫県生涯学習推進計画」
4. 兵庫県県民政策部（2005）「人口減少社会の展望研究報告書」
5. P. ゲデス（1915）：「進化する都市」
6. 兵庫県企画管理部（2004）：「行財政構造改革推進方策後期5か年の取組み」
7. 兵庫県産業労働部（1998）「新・兵庫県科学技術政策大綱」
8. 兵庫県産業労働部（2001）「県立試験研究機関・中期事業計画」

第2章 めざすべき将来像—美しいひょうごを県民みんなとつくる生涯学習院

2-1 将来像

(1) 真の生涯学習を実現する博物館—生涯学習院

ひとはくは、資料収集・保存、展示、調査研究、普及教育、ジーンバンク、データバンク、シンクタンク、学術交流の8つの機能を基盤に、生涯学習の支援と自然・環境に関するシンクタンクを事業の柱として活動を展開してきた。新しい博物館の役割としての生涯学習の支援は、これまでのひとはくの活動に沿うものであり、ひとはくはその実績の上に立ち、真の「生涯学習」を支援する博物館—生涯学習院をめざしていく。

ひとはくが考える「生涯学習」とは、人の生涯にわたる学習を一体的にとらえたものである。人は暮らしの中で、さまざまな形で好奇心を満たしたり、必要な情報を得たり、自ら調べたり、と広い意味での学びを日々繰り返している。この学びは、自分にとって意味のある知識や体験を得るために行うもので、誰かに強制されてやるものではない、主体性を個人においた自律的で自発的な学びである。それは、一個の人間にとって「受精卵から墓場まで」(岩槻邦男館長)の生涯にわたって続くものであり、この連続する主体性を個人においた学びという観点から「生涯学習」をとらえると、学校教育なども、「生涯学習」と別個に存在するわけではなく、年齢や境遇などによってさまざまな形式をもつ学習過程をすべて包含するものとなる。

ひとはくがめざす生涯学習院とは、すべての人の「生涯学習」を支援することを目的とするもので、そこでは誰もが、自然や環境に関心をもつことができ、さまざまな形での好奇心を満たすことができ、自らの能力をステップアップすることができ、多様な人と交流することができる仕組みを構築する。

その実現のためには、無関心層の学習への誘引、ともに学ぶことを可能にする環境、担い手の育成などの課題を克服することが必要であり、ひとはくの館はともいえる「**県民が集い、学び合う参加・交流型の博物館**」をめざし、当面の活動に向けての方向性を次のように設定する。

- 1 県民が活動・交流するステージとしての博物館
- 2 ひょうごの自然・環境を未来に継承する学習コアとしての博物館
- 3 県政課題解決のための知的創造インフラとしての博物館

(2) 県民が活動・交流するステージとしての博物館

1) めざすべき方向

■みんなで作る博物館

兵庫県の基本姿勢である参画と協働にもとづき、多くの県民がさまざまな形で博物館活動に参画し協働によって事業を推進することによって、「みんなで作る博物館」をめざす。

■地域とつながり地域をプレゼンテーションする博物館

地域の自然・環境は、多年にわたる多くの県民のさまざまな活動の成果であり、こうした人の活動そのものを地域の自然・環境とともに見せる、「地域とつながり地域をプレゼンテーションする博物館」をめざす。

■一人ひとりの自己実現の場となる博物館

すべての県民が博物館とのかかわりの中で自己実現の場を見いだすことができる、「一人ひとりの自己実現の場となる博物館」をめざす。

2) 交流を生み促進する「ひょうご・まるごと博物館化

地域の特性を際立たせることで、県土全体の魅力は飛躍的に増す。そのノウハウこそが全国にも発信すべきものといえる。そのために、ひとはくはこれまでの地道な地域との交流をもとに、適切なヒト（地域の担い手）・モノ（地域の自然・環境資源）・コト（地域発見・再生事業）の連携・循環を発生させるエンジンとして機能する。博物館と地域の連携を支援するだけでなく、地域間の連携を支援することも重要である。これらの連携はひょうごの自然・環境を網羅することになり、ひとはくは、その支援拠点となる。

■多自然交流

新しいひとはくは、異なる文化、自然・環境を持つ都市地域と多自然居住地域の交流を推進する。多自然居住地域から都市地域へ生涯学習プログラムを通して、県民全体で多自然居住地域の自然・環境を保全・創造する基盤をつくる。

■流域交流

新しいひとはくは、森・川・海とつながる流域を自然・環境の重要な単位として捉え、上流・下流の活動交流を通して県土の環境軸を形成するエンジンとなる。

■公園交流

新しいひとはくは、公園を代表とする身近な自然とのふれあいを多面的に促進し、自然に対して無関心な層の意識改革を進める。また、集約される人材、環境、財源などをトータルにマネジメントし、地域活性化まで発展させる。

今後、都市と農村はどのようにして新しい里山を作っていくのか。都市と自然はどう関係すべきか。そんなことを総合学習の時間にでもテーマにしてもらいたい。そして、その中心にこの博物館があって、キャラバンなどで各学校へ授業をしに行くというようなことができないものだろうか。（三浦朱門委員長）

「グローバルに考えてローカルに行動する」という言葉は、まったくの嘘だと考えている。むしろ、「ローカルに考えてローカルに行動する」というほうがグローバルにつながりやすいのではないだろうか。（日高敏隆委員）

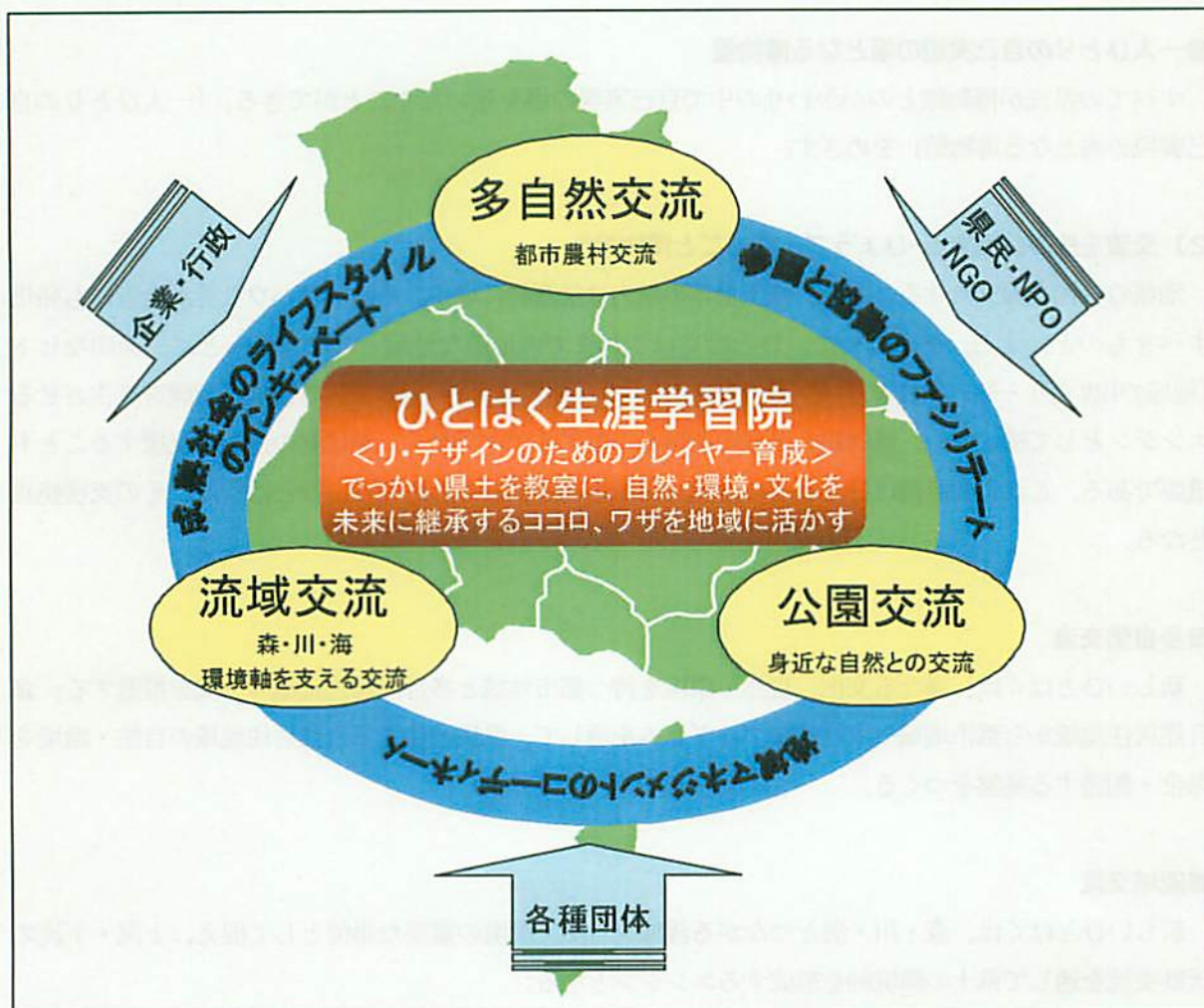


図2-1 人と自然の交流基盤

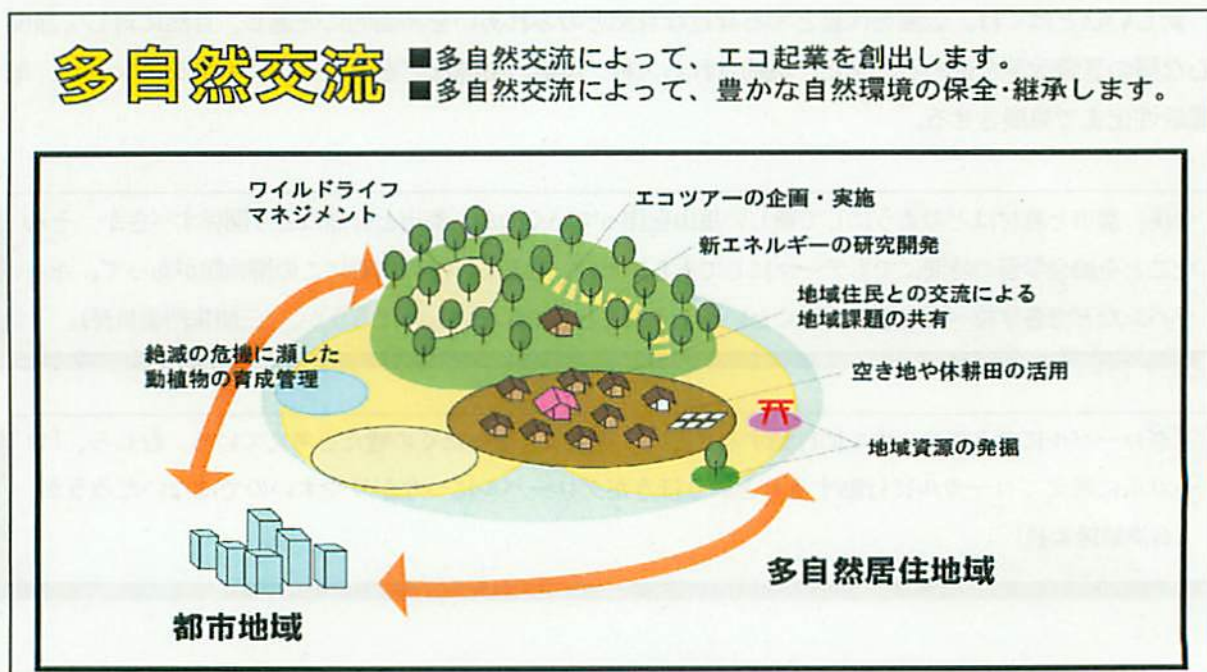


図2-2 多自然交流をベースにしたプログラムの展開イメージ

流域交流

- 流域交流によって、森・川・海の環境軸を確実に形成します。
- 流域交流によって、上流と下流の役割を創造します。

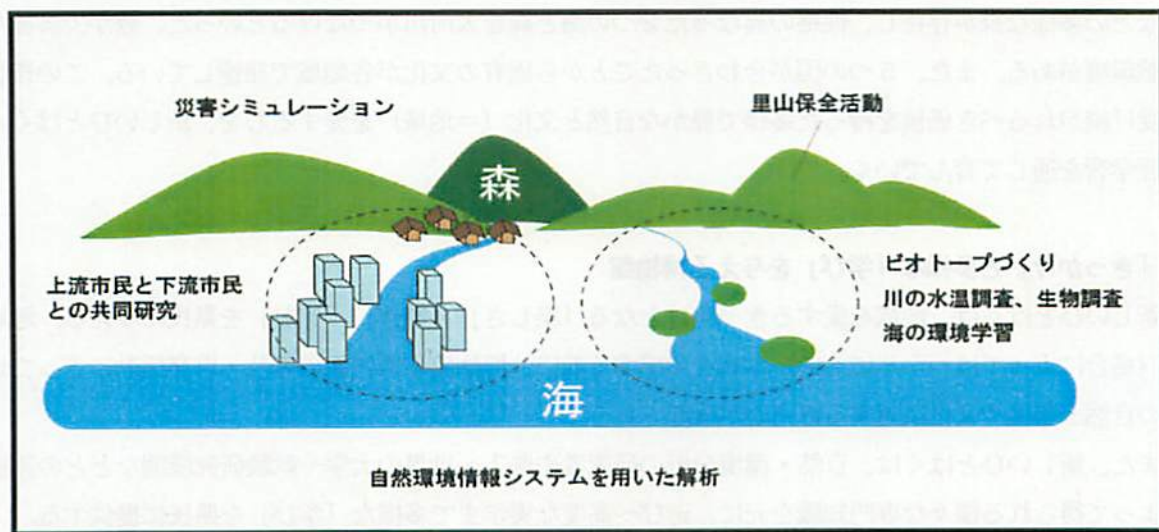


図2-3 流域交流をベースにしたプログラムの展開イメージ

公園交流

- 公園交流によって、身近な自然との交流を多面的に促進し、自然に対して、無関心な市民の意識改革を促します。
- 公園交流によって、プログラム・財源・場所などをトータルにマネジメントし、地域活性化に繋がります。

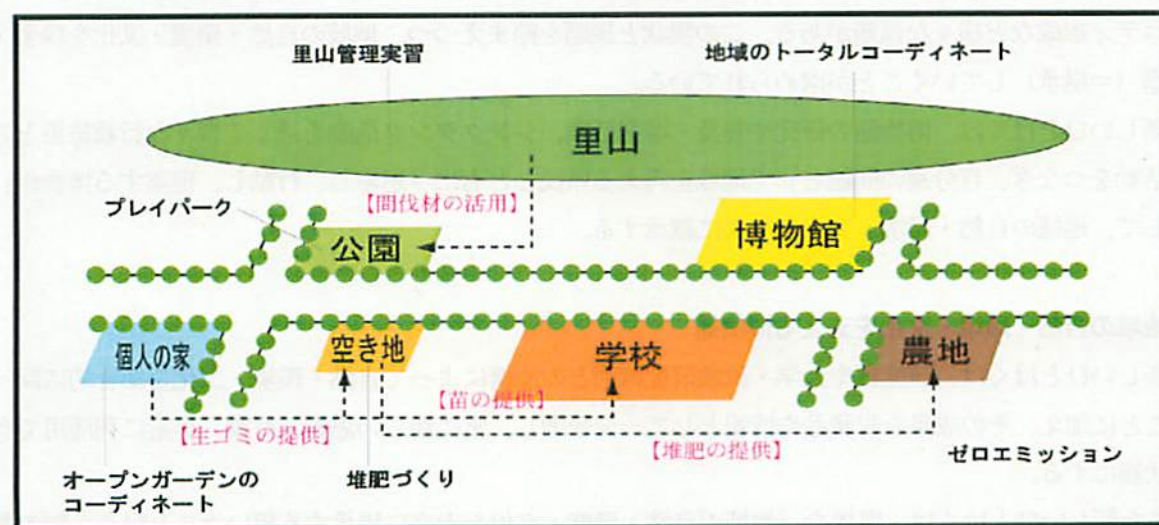


図2-4 公園交流をベースにしたプログラムの展開イメージ

(3) ひょうごの自然・環境を未来に継承する学習コアとしての博物館

1) めざすべき方向

■兵庫の自然と文化を愛する心を育む博物館

兵庫県には、日本海から瀬戸内、淡路島にいたる広い県域にブナ林から照葉樹林、人手の加わった里山などの多様な森が存在し、性格の異なった2つの海と森を大河川がつなげるといった、豊かで多様な自然環境がある。また、5つの国が合わさったことから固有の文化が各地域で発達している。この後世に受け継がれるべき価値を持った多様で豊かな自然と文化(＝地域)を愛する心を、新しいひとはくは生涯学習を通じて育んでいく。

■「きっかけ」と多様な「学び」を与える博物館

新しいひとはくは、地域を愛するきっかけとなる「楽しさ」、「驚き」、「感動」を県民に与える。地域で(場合によってはわかりにくい)本物を体感する前に、博物館や博物館の普及・啓発活動によって地域の自然・環境や文化に対する好奇心が喚起される。

また、新しいひとはくは、自然・環境分野の研究者や県下～世界の大学や試験研究機関などとの連携によって得られる様々な専門知識を元に、遊び～高度な実学まで多様な「学び」を県民に提供する。

生涯学習のアウトカムは「心安らぐ生活」であるべきで、「周りを愛しながら、愛する人に囲まれて生涯暮らしたい」ということが一番の目標になるべきだろう。(鳴海邦碩委員)

教養は人間が生きていくうえでの力になるものである。(鳴海邦碩委員)

■県民とともに地域の自然・環境・文化を未来に継承する博物館

兵庫県には都市域、ニュータウン、多自然居住地域など各地域ごとに多様なライフスタイルがあるとともに、河川の自然再生、里地里山保全、ワイルドライフマネジメント、外来種問題、都市緑化とコミュニティ形成など様々な課題がある。この現状と課題を踏まえつつ、地域の自然・環境・文化を保全・創造(＝継承)していくことが求められている。

新しいひとはくは、博物館の研究や普及・啓発活動、シンクタンク活動を通して様々な行政施策と県民活動をつなぎ、自分達の問題として地域を考える県民とともに「思索し、行動し、提案する博物館」として、地域の自然・環境・文化を未来に継承する。

■地域の自然・環境・文化を支える博物館

新しいひとはくは、研究員や大学・試験研究機関との連携によって自然・環境・文化を総合的に調べることに加え、その成果を収蔵品や情報として一元管理し、常に新しい思索、行動、提案に利活用できる状態にする。

また新しいひとはくは、県民を「地域の自然・環境・文化を未来に継承する担い手」と捉え、知の蓄積を個人にとどめるだけでなく、地域で活用する力をつけることを重視する。ひとはくとともに地域マネジメントに取り組むファシリテーターを育て、コミュニティシンクタンクを育成し、自然・環境分野における行政と県民の中間支援機能を積極的に担う。すなわち地域のひと・資料・情報が交流する拠点

となる。

ミュージアムという範疇に収まりきらないような活動を自由に展開してもらいたい。「人材を育成する」という従来の博物館にはない構想力であり、これがこの博物館の原動力だと思う。(野上智行副委員長)

生涯学習院という言葉は、博物館という言葉の意味を広げることに寄与する。(岩槻邦男委員)

日本人は何を食べて生きているのか。日本人は自然を保全するばかりではなく、もっと自然を有効に活用しなければいけないのではないか。(鳴海邦碩委員)

2) 学びが始まりステップアップするー自然・環境分野の生涯学習センター化

■自然・環境に関する生涯学習拠点(新館)の創出

これまでも、ひとはくはキャラバン事業、地域研究員養成事業、連携団体との関係強化などを通じて、ひとはくと地域との間の事業連携を推進してきた。しかし以下のような課題も見えてきた。

- ・研究員が現場で行うセミナーにも限界がある
- ・キャラバンの展示は、限られた「移動可能な展示物」と「地域用のポスター」を組み合わせたものに固定しつつある
- ・地域研究員養成のノウハウの蓄積と有効活用を視野に入れる必要がある
- ・連携団体との地域研究成果を、内容、資料、展示物へ反映し、地域で持続的に活用できるよう整備する必要がある

ひとはく基本構想で考える新館は、展示、資料、プログラムなど博物館活動全体を地域研究・活動の成果とつなげることで、それらを全て移動可能なものにするによって、博物館活動全体が県下で研究・試行され、蓄積され、具体化され、地域で活用されることとなる。

また、県下各地で活動する地域団体、学校、企業などが、上記の全県下での博物館活動を通して交流する。その拠点として、成果発表、地域での生涯学習の伝達手法の学習など、地域間の交流拠点ともなる。

この2つの機能によって、ひとはく基本構想で考える新館は、自然・環境に関する生涯学習拠点となる。

■環境優先社会を担う人材養成

あらゆる立場、世代の県民がどこでも生涯学習できる基盤となるため、①地域で持続的に研究・学習し博物館活動に還元する、②地域研究の成果も活用しつつ博物館活動を間接的に地域で展開できることのできる人材を養成する。

従来の子ども向け、来館団体向けといった「普及啓発活動の対象」を、子どもも楽しめるミュージアムサービスから選択できるセミナー群、生涯学習院大学院に在籍しての地域研究など「生涯学習による成熟社会の担い手全体」にまで拡大し、環境リテラシーの全県向上を推進しつつ地域担い手を養成する基盤を整える。

この人材が地域の博物館（相当施設）、学校、公民館などで持続的に生涯学習を担うことによって、全県下の生涯学習機能が向上する。

（４） 県政課題解決のための知的創造インフラとしての博物館

1) めざすべき方向

■地域の自然・環境・文化を支える博物館

新しいひとはくは、研究員や大学・試験研究機関との連携によって自然・環境・文化を総合的に調べることに加え、その成果を収蔵品や情報として一元管理し、常に新しい思索、行動、提案に利活用できる状態にする。

また新しいひとはくは、県民を「地域の自然・環境・文化を未来に継承する担い手」と捉え、知の蓄積を個人にとどめるだけでなく、地域で活用する力をつけることを重視する。ひとはくとともに地域マネジメントに取り組むファシリテーターを育て、コミュニティシンクタンクを育成し、自然・環境分野における行政と県民の中間支援機能を積極的に担う。すなわち地域のひと・資料・情報が交流する拠点となる。

2) 知恵を結びつけ解決を図るーシンクタンク・ネットワーク化

「環境問題」を解決するには、行政の各部局に、自然と環境に関する豊富な情報と課題解決のノウハウを提供し、施策をつなぐ横系の機能を果たす専門機関が必要である。新しいひとはくは、自然・環境面のみならず、人の「こころ」にかかわる文化面でも県立の他の文化施設と連携することにより、環境優先社会を支えるあらゆる施策や県民活動を支援する中間支援機能・コーディネーション機能を果たす。

■研究機関との連携

併設する兵庫県立大学自然・環境科学研究所の他 3 系（景観園芸系：淡路景観園芸学校、田園生態系：コウノトリの郷公園、宇宙天文系：西はりま天文台公園）や県下の国公立の大学や専門学校（神戸大学、関西学院大学、神戸芸術工科大学、湊川女子短期大学、国際環境専門学校など）とは、分野を補完するとともに研究・人材養成において連携する。また、県立試験研究機関（健康環境科学研究センター、工業技術センター、農林水産技術総合センターなど）とは、研究成果の展示化や一般への普及・啓発、自然・環境分野との学術交流などにおいて連携する。

■生涯学習施設との連携

県立美術館や県立芸術文化センターなど人文系施設、県立歴史博物館や県立考古博物館など歴史系施設と事業連携することによって、自然・環境と様々な県民・ライフスタイルをつなげることを試みる。また、神戸市須磨水族園、伊丹昆虫館、篠山チルドレンミュージアムなど県下の関係博物館（相当施設）とは、生涯学習を通したインタープリターなど人材養成やプログラム開発について連携し、いつでもどこでも洗練された生涯学習に参加できる環境をつくる。

■学校教育との連携

県下の小・中・高等学校とは、地域の自然・環境を活用した学習プログラムや学習教材の開発、学校

での来館時の授業と連動した学習プログラムの開発、学校教育現場での博物館資料の活用、学校教員のリカレント教育などについて連携することによって、学校教育を支援するとともに、学校以外での多様な学習環境を創出する。

農協は農協で独自に研究しているだろう。しかし、農業従事者の質問に対して、農協がすべてを答えきれ
るわけではないように思う。農協や大学や博物館が連携することが重要ではないか。(三浦朱門委員長)

■海外との連携

ひとはくは、これまで、マレーシアのサバ大学と連携協定を結び、毎年ボルネオジャングルスクールを開催することにより、海外との連携を生涯学習に効果的に取り入れてきた。今後も生涯学習院をより効果的・強力なものにするため、海外の大学や博物館、各種研究機関との連携を強める。

2-2 生涯にわたる学びのパートナーとしての生涯学習院—ひょうごの生涯学習の将来像

(1) 生涯学習のグランドビジョン

兵庫県での生涯学習のグランドビジョンは、自然・環境系、歴史系、人文系の博物館・美術館が核となってライフスタイル全般をフォローしつつ、それぞれが類似分野の大学や試験研究機関と研究・人材養成面で協力し、学校教育や、博物館（相当施設）、公民館、公園といった生涯学習施設と展示や普及・啓発活動面で連携することによって、全ての立場、世代の県民がどこでも学習できる環境を整えるものである。このグランドビジョンによって、県民の環境リテラシーの向上から地域での多様な活動まで支援できる体制が整う。

今後のひとはくの生涯学習支援機能は、このビジョンを踏まえて、自然・環境分野を軸にしつつ、多くの関連施設との連携のもと、多様な地域課題に対応しうる間口の広さと奥行きを併せ持つものとして構想する。

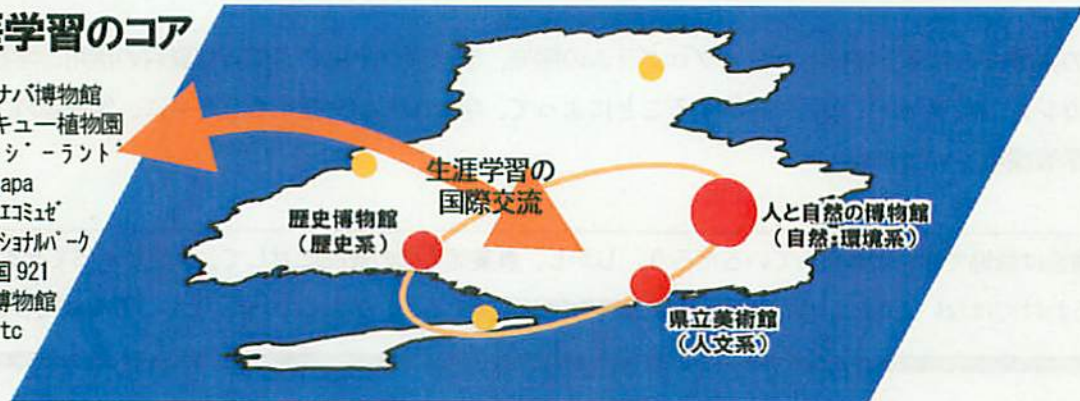
「これは歴史博物館がやるべきこと」、「それは民族博物館がやるべきこと」などと、博物館のテーマに分けられてしまわないかが心配である。(角野幸博委員)

連携大学のネットワークをうまく活かせるように特色を出してもらいたい。人と自然というテーマをしつかり提示することができれば、自然系や人文系の大学との連携がうまく進むのではないだろうか。(野上智行副委員長)

ひとはくが、人と自然の関係を研究するための拠点施設となって、世界中の情報が集まる場所になることを願っている。これまでの拠点施設ではなく新しい拠点のあり方について検討してもらいたい。(上野祐子委員)

生涯学習のコア

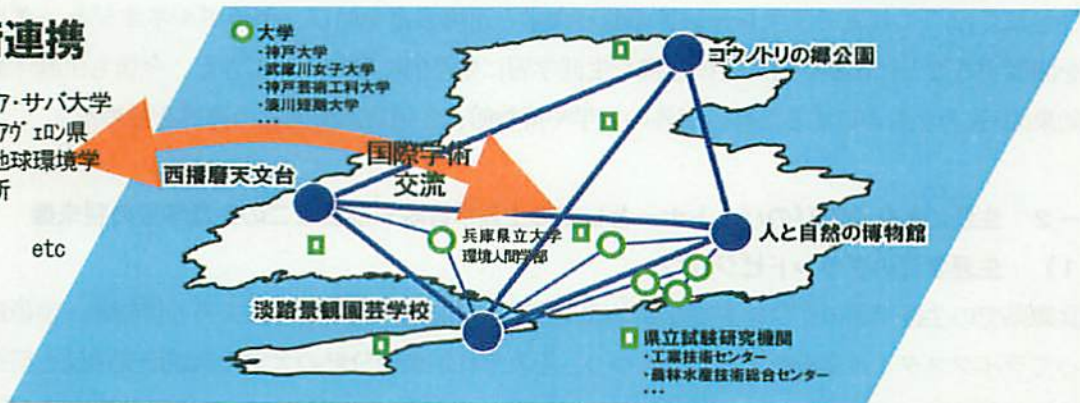
- ・国立サバ博物館
- ・英国キュー植物園
- ・ニューシーランド Tepapa
- ・フランス・エミゼ
- ・米国ジョージアパーク
- ・台湾国 921 地震博物館 etc



■地域の自然環境を活かした学習プログラムの開発 ■学校での博物館資料の活用 ■学校教員のリカレント教育

学術連携

- ・マレーシア・サバ大学
- ・フランス・アグエロ県
- ・総合地球環境学研究所 etc



■大学や試験研究機関との人材、学術交流 ■生涯学習院での分野の補完 ■研究成果の展示化

生涯学習連携

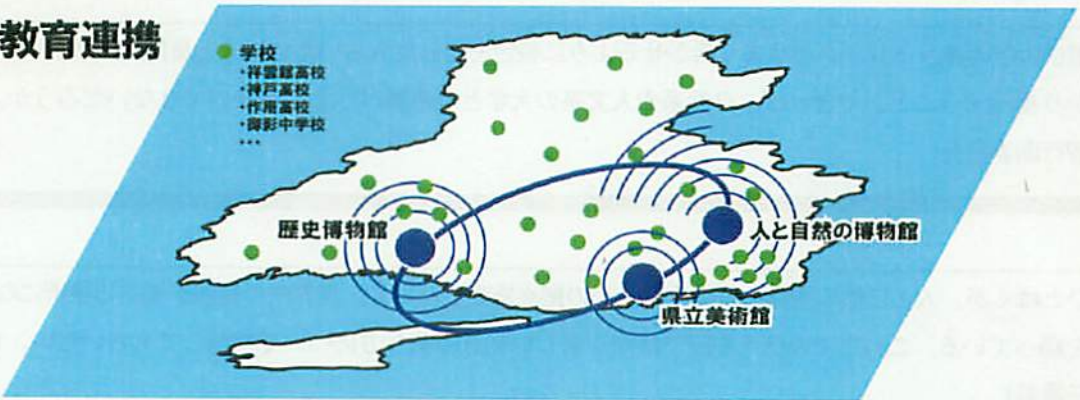
- ・国立科学博物館
- ・西日本自然系博物館ネットワーク
- ・日本科学未来館
- ・北九州市立自然史・歴史博物館
- ・北海道大学総合博物館 etc



■インタープリターなどの人材育成 ■より厚みのある生涯学習プログラムの開発

学校教育連携

- ・学校
- ・祥雲館高校
- ・神戸高校
- ・作楽高校
- ・御影中学校 ...



■地域の自然環境を活かした学習プログラムの開発 ■学校での博物館資料の活用 ■学校教員のリカレント教育

(2) 生涯学習の実現方向—生涯学習院の構築

■多様な年齢層とステークホルダーを対象とした生涯学習体制

生涯学習院は、ひとはくが、大学、大学院、試験研究機関、公民館等各種施設、各種団体、NPO などと連携することによって、誰もが生涯を通じて、いつでも、どこでも、どんなときでも学ぶことができる県民のための生涯学習体制を全県土に構築しようとするファシリティ（機能）である。

そのため、生涯学習院の提供する生涯学習のプログラムは、乳幼児レベルから大学院レベルまで多様なものとし、レベルに合わせた段階的な学びを通じてレベルアップできるようにする。

生涯学習院においては、県民が自分のペースで学ぶことができる。単位を取得し、その積み重ねの到達点としてひとはく独自の称号（たとえば生涯学習院士）や修士号（平成 19 年度大学院設置予定）を得ることも可能である。このことが学習のステップアップの動機付けとなる。

多様な年齢層、多様なステークホルダー、多様なレベル（無関心層、関心層、担い手）を対象とするために、学び手の好みやニーズに合わせて、展示や学習プログラムに驚き、楽しみ、関心の向上、交流の促進、担い手の育成などの要素を大幅に付加し、多様だがわかりやすい入口を用意する。また、行政向け、学校教員向けなどのように、学び手の立場に応じた多彩で魅力的なパッケージを提供する。

■生涯学習院のコアとなる博物館活動

生涯学習院において、ひとはくは、各種機関・施設・団体・NPO 等との連携によって形成されるネットワークのハブと位置づけられる。ひとはくは、県民に提供するプログラムのデザインを通じて、このネットワークを維持・発展させていく役割を担う。ひとはく自らが展開する活動は、ネットワークの核となるもので、ミュージアムサービス、セミナー、キャラバン等のサービス事業を統合した、新しい「資料展示学習」「交流学习」の学習活動と、県民自らがさまざまな地域課題の解決に取り組むことを支援するしくみであるシンクタンク活動、この2つの活動を自律的に地域で展開する能力を養う「担い手学習」からなる。いずれも博物館のもつ強力な研究機能を基盤とするもので、これらの活動を通じて成熟社会を担う人材を育成し、地域コミュニティの創出と個の確立に寄与することをめざす。

■実践機会の提供 (OJT : On the Job Training)

生涯学習院における学習は、体験を通じて学ぶことが基本である。このため生涯学習院が提供する各種プログラムにおいて、県民はサービスの受け手にとどまることなく、何らかの役割を担うことによって学ぶ OJT (On the Job Training) 方式を採用する。この OJT に参画し、成果をあげることにより、学習者は単位を取得することができる。また、この方式は、生涯学習院のもうひとつの基本である、「ともに学ぶこと」の実現にも寄与する。生涯学習院においては、教える側と学ぶ側に立場が固定されるのではなく、相互に学び合うことを通じて総合的な学習が可能になる。生涯学習院の各種プログラムは、こうした観点から、実践機会の提供というポリシーにもとづいてデザインされる。

■ひとはくと生涯学習院生

ひとはくを訪れる人、訪れなくとも地域でひとはくとかかわりを持つ人は誰でも、生涯学習院生になることができる。ひとはくを訪れる人は、少なくとも交流空間に身をおき、展示に接し、驚き、感動して、学びの意欲をもち、生涯学習院生に移行する機会をもつことになる。

■生涯学習院生の学習

生涯学習院生は、ひとはくが提供する多様な学習プログラムを受講するだけでなく、それをもとに現地調査等を行い、レポートを作成し、展示として発表し、ひとはくの来館者とインタープリターとして対話し、さらにキャラバン事業をおこなって地域展開をおこなっていくといった、一連の OJT（体験を通じた学び）に身をおくことを、ひとつの典型とする。むろん、この OJT には、年齢層・学習レベルに応じてさまざまなパターンが存在する。

■生涯学習院生と地域研究員

平成 16 年より育成を開始した地域研究員は、生涯学習院の開校時には、生涯学習院生のなかに位置づけられることになる。地域研究員は、すでに博物館活動に参加し、場合によっては、地域活動をすでに展開しているので、生涯学習院生のなかでも、すでに担い手となっている人々、あるいは担い手になろうとしている人々と位置づけられる。

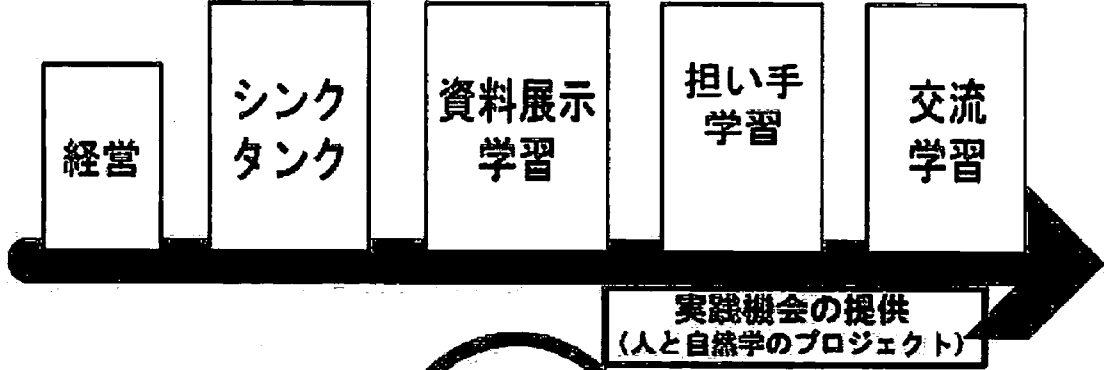
■生涯学習院の単位の取得と称号の授与

生涯学習院に入学した県民は、ひとはくの学習プログラムの受講、キャラバン事業の実施、研究活動の展示発表等により、単位を取得できる。また、兵庫県立大学環境人間学部の大学院や他大学、その他の連携組織との単位互換により単位を取得できる。また、一定の単位を取得した時点で、ひとはく研究員・連携団体教員等・行政担当者・県民代表者などを前にして発表会をおこない、生涯学習院士（仮称）の称号をえることができる。

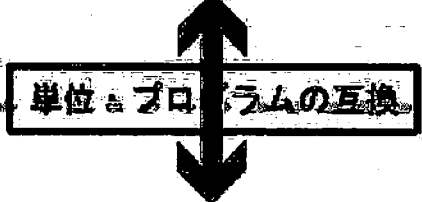
さらに、より高度な生涯学習の担い手になるべく、平成 19 年度の設置予定のひとはく大学院（兵庫県立大学環境人間学研究科多様性戦略コース）に入学し、修士号を取得することもできる。この生涯学習院修士は、県下各地の博物館（相当施設）のインタープリター、生涯学習を支える施策を立案する行政職員、総合的な学習を小～高校で実践する教員、環境に配慮した企業活動（CSR）を担う民間企業の人材として、更なる生涯学習の機会を創出することとなる。

連携により実現するひとはく生涯学習院の機能

兵庫県立人と自然の博物館



ひとはく連携グループ

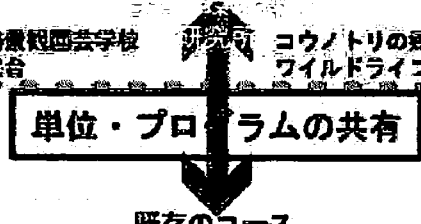


各種高齢者大学 生涯学習カリキュラム
企業等インターンシップ 県内の各種大学

連携組織・団体

ひとはく大学院
(平成19年春ひとはくに新設予定)

淡路島四国高等学校 美浜谷
コウノトリの郷公園 ワイルドライフなど



既存のコース

兵庫県立大学環境人間学部大学院

図2-6 連携により実現するひとはく生涯学習院の機能

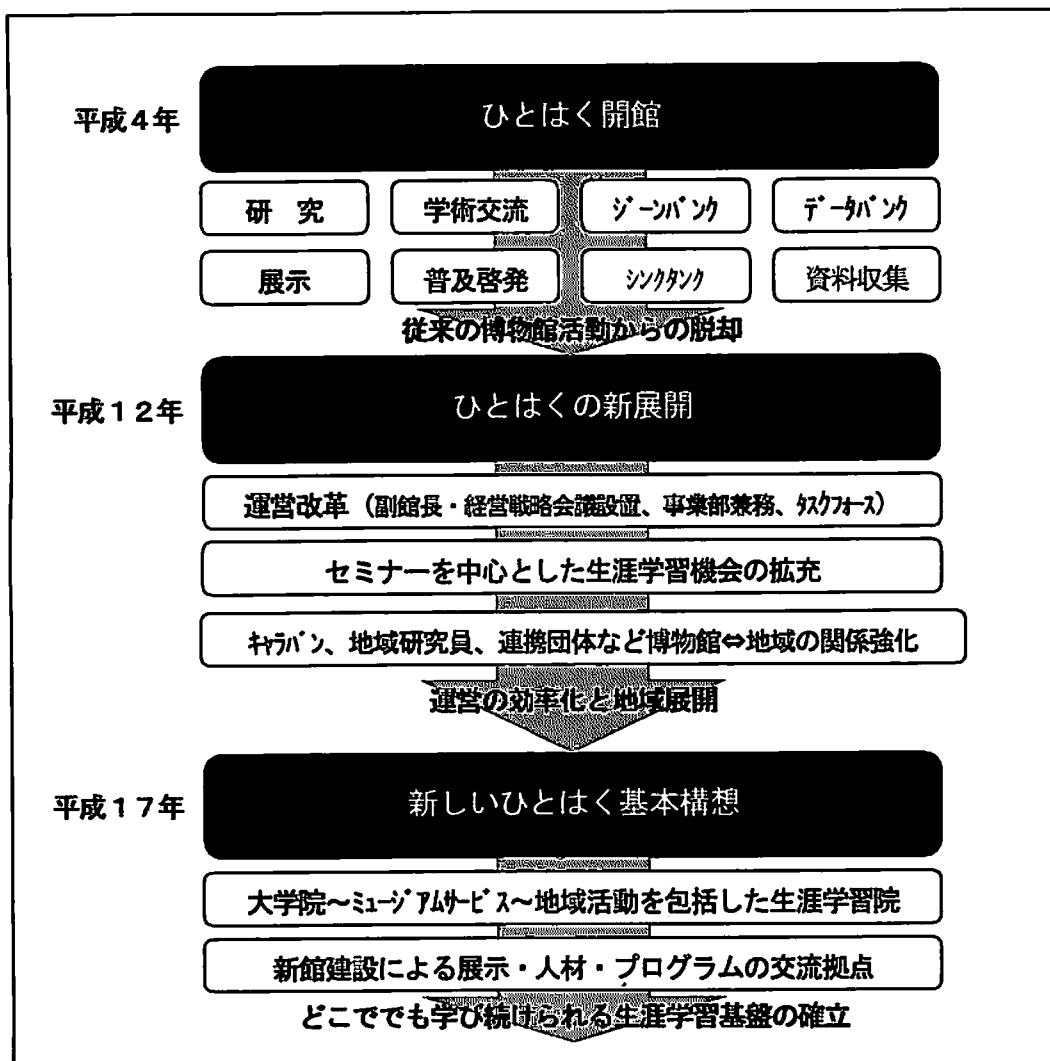


図2-7 基本構想の位置づけ

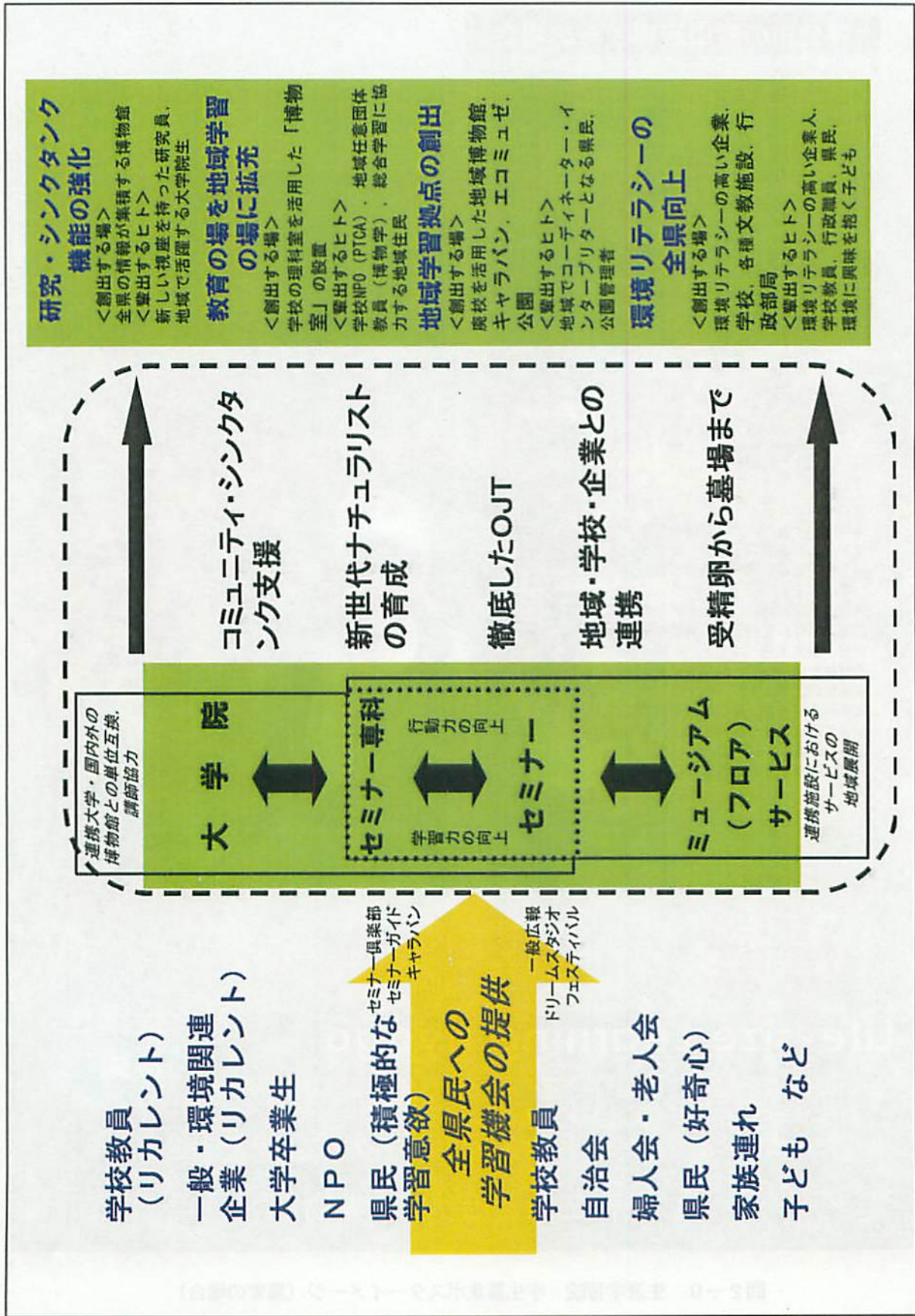


図 2-8 生涯学習院の新たな普及活動の構成

養父市の竹山宏樹さんの場合

私は7年かけて生涯学習院を卒業します。
研究テーマは「生物多様性と農業」。
調査地は、私の畑です。

竹山さん曰く・・・
畑はヒバリなど様々な鳥類の繁殖地
です。既存の農法を維持しながら、
鳥たちの繁殖を妨げない方法を研究
しています。
環境の基礎知識は、恒島農政局の公
開講座や休日を利用して博物館セミ
ナー、県立大学、コウノトリ郷公園
の講義を活用して、6年間で単位を
取りたいと思います。
私の研究成果を、多くの農家の方に
知って頂くことで環境に優しい暮ら
しができるはず。そのためにも、博
物館に展示する方法も学習したいと
思います。

Life-size Learning Hyogo

生活の拠点を移すことなく、マイペースで身近な環境を実践的に科学する、古くて新しい研究スタイルです。
あなたの生活に密着した課題の探求を豊富なスタッフがサポートします。

受講生
募集！

兵庫県立人と自然の博物館

図2-9 生涯学習院 学生募集ポスターイメージ（農家の場合）

豊岡市の松野隆さんの場合

私は5年かけて生涯学習院を卒業します。
研究テーマは「水生昆虫と学校教育」、
調査地は、もちろん「小学校」です。



松野さん曰く・

川を題材とした総合学習は、実は教員の総合力が試されている場であり、地域の川づくりのあり方とも密接に関わりがあります。水生昆虫を通じて、学校教育とリンクした形で新しい川の学習方法を開発したいと思います。週末は、人と自然の博物館のセミナーを受講して、5年間で単位取得を目指して、授業しながら研究しています。私の研究成果を、多くの教員の方にとって頂くことで環境学習が発展するはず。そのためにも、博物館の教材開発に貢献したいと思います。

Life-size Learning Hyogo

生活の拠点を移すことなく、マイペースで身近な環境を実践的に科学する、古くて新しい研究スタイルです。

あなたの生活に密着した課題の探求を豊富なスタッフがサポートします。

受講生
募集！

兵庫県立人と自然の博物館

図2-10 生涯学習院 学生募集ポスターイメージ (学校教員の場合)

神戸市の中西剛さんの場合

私は高校2年生。何年かかるか分かりませんが生涯学習院を卒業したいと思っています。研究テーマは「昆虫採集とコミュニティデザイン」。調査地は、「兵庫県全部」です。



中西さん曰く・・・
博物館には、小学校3年生から通っています。現在は、高校生サークル「テネラル」で、昆虫採集を通じた地域交流活動を実践しています。昆虫を趣味的に採るだけでなく、採集会を通じたコミュニティ形成を勉強したいと思っています。
大学は理学部に進学しますが、ひとはくにも通いたい。できれば、大学卒業と同時に生涯学習院も卒業したい！
大学では理論を、ひとはくでは実践を学びたいと思っています。

Life-size Learning Hyogo

生活の拠点を移すことなく、マイペースで身近な環境を実践的に科学する、古くて新しい研究スタイルです。
あなたの生活に密着した課題の探求を豊富なスタッフがサポートします。

受講生
募集！

兵庫県立人と自然の博物館

図2-11 生涯学習院 学生募集ポスターイメージ（高校生の場合）

三田市の後藤順子さんの場合

私は6年かけて生涯学習院を卒業します。
研究テーマは「環境にやさしい暮らし方」。
調査地は、私の家です。

後藤さん曰く・・・

最近では地球温暖化とか、遺伝子組み換え食品の問題とか、不安なニュースが多いですよね。将来子供たちが大きくなって自分の家庭を持つとき、安心して暮らせる環境が残っているのかしら？難しいことはよくわからないけれど、自分の家で環境保全のためにできることがきっとあるはず。インターネットを使えば情報はたくさん手に入るけれど、どの情報が正しいのか迷うことも多いのです。なので、正しい環境の基礎知識を博物館セミナーで学び、無理なく続けられる環境にやさしい暮らしを研究して、6年間で単位を取りたいと思います。子供の大学卒業とどっちが早い競争です！

私の研究成果を多くの主婦に知っていただくことで、環境にやさしい暮らしができるはず。そのために、博物館で展示する方法も学習したいと思います。

受講生
募集！

Life-size Learning Hyogo

生活の拠点を移すことなく、マイペースで身近な環境を実践的に科学する、古くて新しい研究スタイルです。

あなたの生活に密着した課題の探求を豊富なスタッフがサポートします。

兵庫県立人と自然の博物館

図2-12 生涯学習院 学生募集ポスターイメージ (主婦の場合)

三木市の佐藤庄一さんの場合

私の年は、、、ご想像
にお任せします(笑)。
何年かかるか分かりません
が、生涯学習院を卒業し
たいと思っています。
研究テーマは「こどもの
理科離れを防ぐための教
材開発」。
調査地は、「北播磨地域」
です。

佐藤さん曰く・・・

退職して時間にゆとりができました。もともと子供が好きだったんですが、自分の子供はすっかり大きくなってしまって、もっとも相手にしてくれませんが(苦笑)。

最近博物館でも子供向けにいろいろなイベントをやってるんですね。近頃の子供は自然離れ、理科離れが怠念されていますが、それはきっと子供たちの親世代が自然の中で遊ぶ経験をしていないから、うまく伝えられないんでしょう。

ひとくくで、我々の世代の持っている自然に関する知識をどうすれば子供たちに楽しく伝えられるのか、実践学びたいと思っています。

受講生
募集！

Life-size Learning Hyogo

生活の拠点を移すことなく、マイペースで身近な環境を実践的に科学する、古くて新しい研究スタイルです。
あなたの生活に密着した課題の探求を豊富なスタッフがサポートします。

兵庫県立人と自然の博物館

図2-13 生涯学習院 学生募集ポスターイメージ (高齢者の場合)

丹波市の松浦綾さんの場合

私は中学2年生。何年かかるか分かりませんが生涯学習院を卒業したいと思っています。

研究テーマは「野生動物と丹波市民との関わり」。調査地は、「丹波市」です。

松浦さん曰く・・・

ほら、すごいでしょう！シカの頭骨。私が見つけた。丹波ではシカが増えすぎて農作物を食い荒らしたりするから、農家の人からは嫌われてるんです。だから、個体数を管理しなくちゃいけないんだそうです。今は人と動物がどうやって一緒に暮らしていくのがいいか、先生と一緒に野外調査や聞き取り調査を行っています。

生き物には興味があって、将来はそっち方面に進みたいとなまかに思ってますけど、生き物が好きだっていうと浮いちゃうから、男はあまり学校ではそういう話しないようにしてます。でも生涯学習院の人たちは、いろんな年齢の人がいて、生き物好きの人も多くて楽しい。でもって“博士”にいろいろ教えてもらえますよね。生き物系の仕事につくためのノウハウも勉強できる。かも？

受講生
募集！

Life-size Learning Hyogo

生活の拠点を移すことなく、マイペースで身近な環境を実践的に科学する、古くて新しい研究スタイルです。

あなたの生活に密着した課題の探求を豊富なスタッフがサポートします。

兵庫県立人と自然の博物館

図2-14 生涯学習院 学生募集ポスターイメージ（中学生の場合）

(3) 美しいひょうごの実現一期待される効果

■自然・環境に関する生涯学習拠点（新館）の創出

これまで、ひとはくはキャラバン事業、地域研究員養成事業、連携団体との関係強化などを通じて、ひとはくと地域との間の事業連携を推進してきた。しかし以下のような課題も見えてきた。

- ・研究員が現場で行うセミナーにも限界がある
- ・キャラバンの展示は、限られた「移動可能な展示物」と「地域用のポスター」を組み合わせたものに固定しつつある
- ・地域研究員養成のノウハウの蓄積と有効活用を視野に入れる必要がある
- ・連携団体との地域研究成果を、内容、資料、展示物へ反映し、地域で持続的に活用できるよう整備する必要がある

ひとはく基本構想で考える新館は、展示、資料、プログラムなど博物館活動全体を地域研究・活動の成果とつなげること、それらを全て移動可能なものにするることによって、博物館活動全体が県下で研究・試行され、蓄積され、具体化され、地域で活用されることとなる。

また、県下各地で活動する地域団体、学校、企業などが、上記の全県下での博物館活動を通して交流する。その拠点として、成果発表、地域での生涯学習の伝達手法の学習など、地域間の交流拠点ともなる。

この2つの機能によって、ひとはく基本構想で考える新館は、自然・環境に関する生涯学習拠点となる。

■環境優先社会を担う人材養成

あらゆる立場、世代の県民がどこでも生涯学習できる基盤となるため、①地域で持続的に研究・学習し博物館活動に還元する、②地域研究の成果も活用しつつ博物館活動を間接的に地域で展開できることのできる人材を養成する。

従来の子ども向け、来館団体向けといった「普及啓発活動の対象」を、子どもも楽しめるミュージアムサービスから選択できるセミナー群、生涯学習院大学院に在籍しての地域研究など「生涯学習による成熟社会の担い手全体」にまで拡大し、環境リテラシーの全県向上を推進しつつ地域担い手を養成する基盤を整える。

この人材が地域の博物館（相当施設）、学校、公民館などで持続的に生涯学習を担うことによって、全県下の生涯学習機能が向上する。

キャラバンは「驚き」という意味での大きな使命を担っているだろう。キャラバンによって与えられた驚きが、三田のひとはくへ行ってみたいと思う気持ちにつながるだろう。（三浦朱門委員）

ひとはくにおける「人」が大切である。この場合の「人」は、生物学上の「ヒト」であると同時に歴史的・文化的な「人」であり、なおかつ現代に生きる「人」であり、これからの将来を担う「人」の生き様であるように思う。（野上智行副委員長）

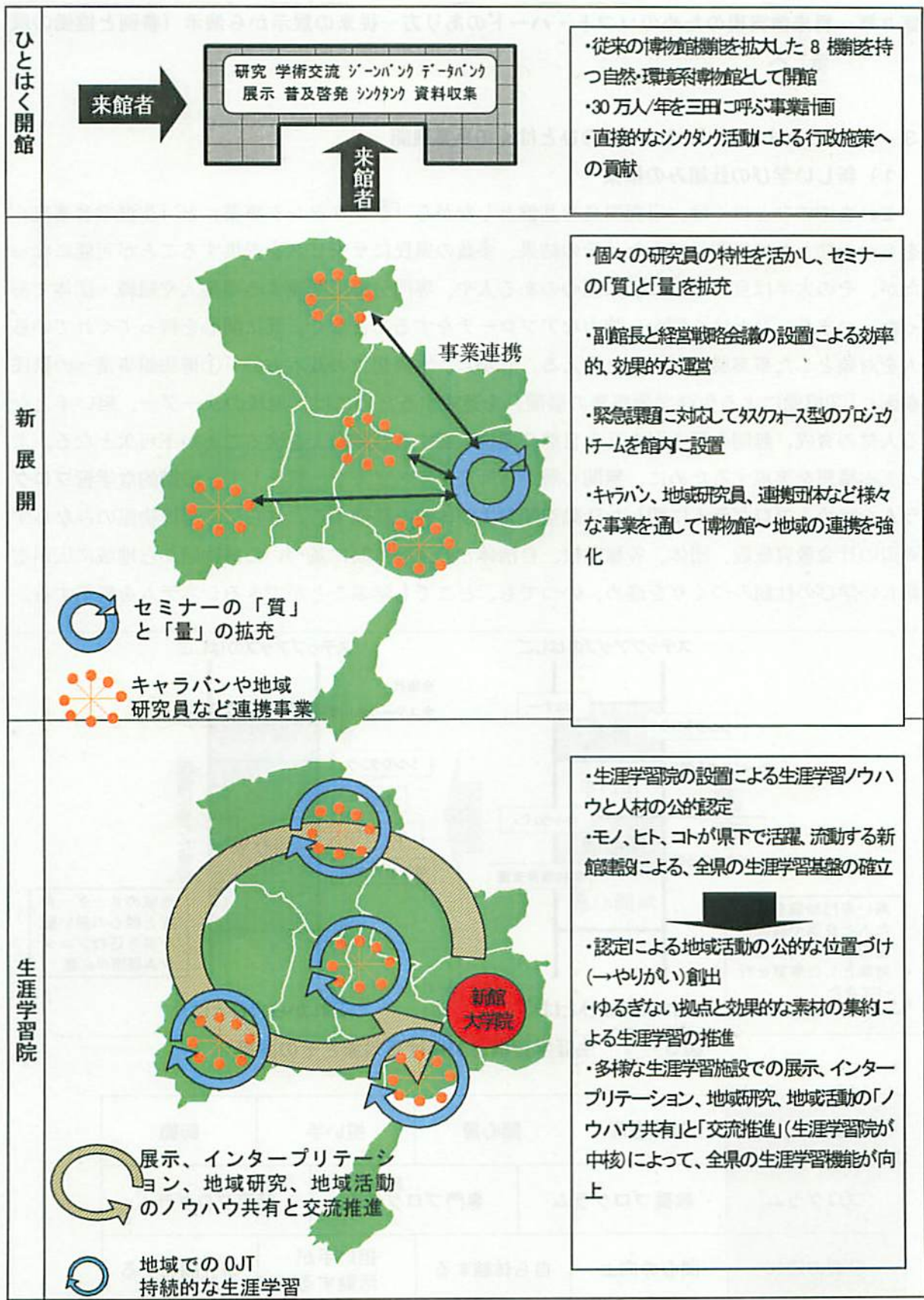


図 2-15 ひととはく基本構想の主な効果

第3章 将来像実現のためのソフト・ハードのあり方—従来の展示から演示（参画と協働の展示）へ

3-1 「これまで」と「これから」のひとはくの事業展開

(1) 新しい学びの仕組みの構築

これまでのひとはくは、研究開発を基盤としながら「シンクタンク事業」と「生涯学習事業」を2つの柱として展開してきた。その結果、多数の県民にサービスを提供することが可能になったが、その大半は自然環境に既に関心のある人や、専門分野に関連する職業人や組織・団体であった。つまり、ひとはく側から強力なアプローチをすることなく、既に関心を持ってきている人を対象とした事業展開だったと言える。しかし、本構想での基本方針「①博物館事業への県民参画」「②協働による生涯学習事業の展開」を達成するためには、地域のリーダー、担い手となる人材の育成、無関心層を引き込み自然や環境に関する意識向上を図ることが不可欠となる。よって本構想を実現するために、無関心層から師範クラスまでを一貫として、段階的な学習プログラムを定め、プログラムに即した活動空間および体制を整備する。さらに、当博物館のみならず、周辺の社会教育施設、団体、各種学校、自治体との連携体制に基づいた博物館から地域に広がる新しい学びの仕組みづくりを進め、いつでも、どこでも学ぶことができるシステムを構築する。

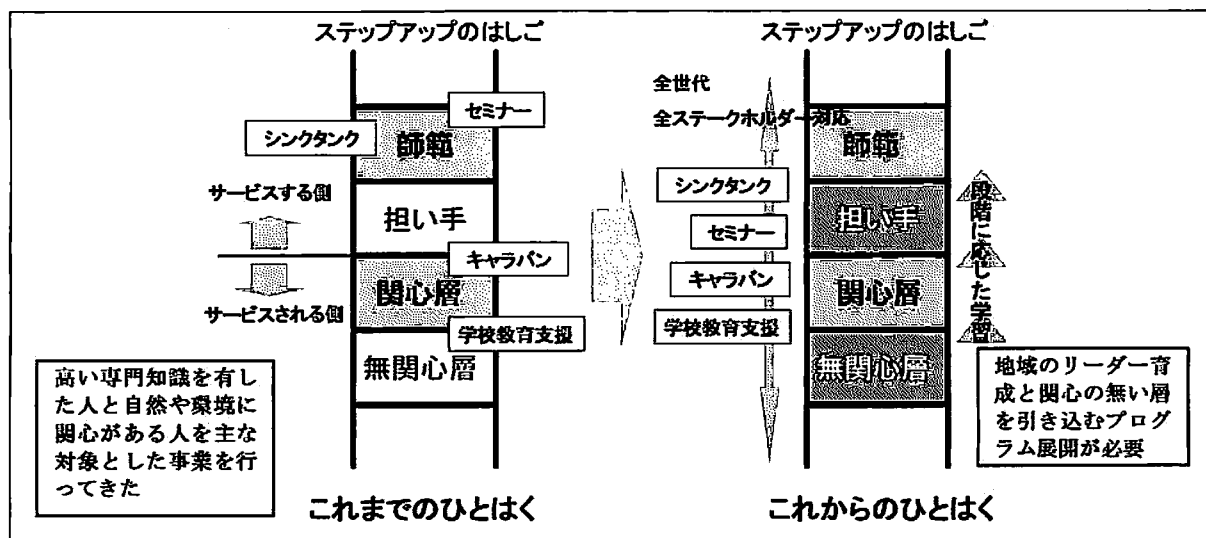


図3-1 生涯学習構想が掲げる対象とその意義

来館者属性	無関心層	関心層	担い手	師範
プログラム	教養プログラム	専門プログラム	師範プログラム	
学習の流れ	関心の向上	自ら体験する	担い手が活動する	研究開発する
展示・活動空間の利用	驚きと交流の展示	自ら学べる展示	分かり合う展示	

図3-2 来館者属性に対応したプログラム、学習の流れ、展示・活動空間の利用

(2) ひととはく生涯学習院の学習空間の役割

県民が自律的・積極的に博物館事業や地域活動へ参画するには、まず博物館において好奇心がゆさぶられる強いインパクトを受け、自然・環境を自分のことと受け止め、自ら考える体験が必要である。ひととはく本館は開館以来「知の伝達」機能を担ってきたが、加えて「知の体験」機能を持つプログラムや展示、それを支える機能・施設が必要となっており、その具体化として新館の学習空間が必要となる。

(3) ソフト・ハードの融合“演示”と劇場博物館

ひととはく新館では、本館が担ってきた知識・情報を「伝える」というサービスではなく、「調べる」「つくる」も含めた博物館活動全体に県民が参画し、その学習活動の見学・体験をサービスとして来館者に提供する。これは“来館者が研究員になる”ということであり、研究者の視点をもって自然・環境を見る体験を得ることである。同様に、クラフト、遊び、実験など自然・環境を様々な方法で楽しむ、その道の“匠”になることもできる。また、このような技術を持たない／期待しない一般来館者には、自身が虫や鳥など自然・生物や創造主になりきってもらう。

これら、来館者の属性や知識レベル、技術レベル、興味の強さ毎に様々なヒトやモノになることを通して、普段の自分と異なる視点で自然・環境を体験できるソフトとハードが融合したサービスを“演示”（ヒト・モノを演じながら理解し、他者にも楽しさを示すことができる）と呼び、新しいひととはくが県民に提供するサービスの根幹とする。この“演示”によって、研究員・展示物から来館者・県民に主役が移り、全ての博物館活動が県民のステージになる。

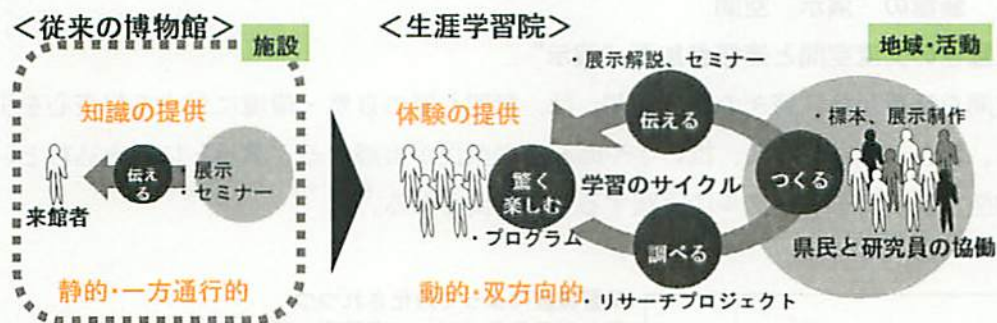


図3-3 従来の博物館から生涯学習院へ

誰が	誰になって	何を	どのように
ステップアップのはしり	研究員	研究環境	見習い
	学芸員	調査・整理	自主学習
	匠	楽しみ方	体験
		遊び方 作り方	
無関心層	自然・生物・ 創造主	体験空間 シミュレーター	なりきり 選択

図3-4 多様な来館者ごとに選択できる“演示”

(4) 学習層に対応したプログラムと空間の提供

無関心層から師範まで、あらゆる興味・知識・技術レベルの県民が学習できる、各段階のプログラムを提供する。各段階のプログラムは、研究員が直接指導・助言するだけでなく、「担い手」養成プログラムは師範層の県民が、「関心層」へのセミナー実施は担い手が行う等、県民から県民への知識・技術の伝達をはかる。

また、県民から県民への伝達を中心とした学習コアとなる新館は、各段階のプログラムに対応した学習空間から構成され、ソフト・ハードが一体となった“演示”の学習・実践の場として機能する。

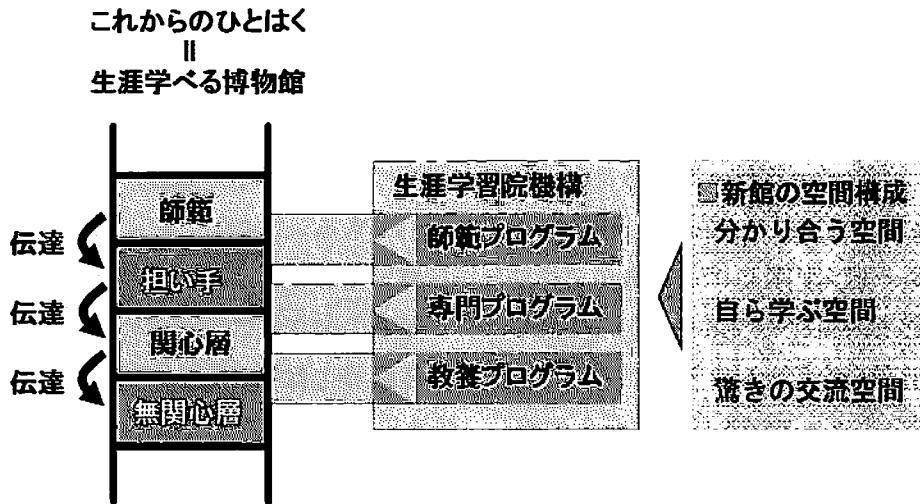


図3-5 学習層に対応したプログラムと空間の提供

3-2 新館の“演示”空間

(1) 驚きの交流空間と連鎖参加型“演示”

大空間を活用した「驚きの交流空間」は、無関心層の自然・環境に対する好奇心を引き起こしながら、驚き、感動を与え、担い手や師範層の県民が実践する“演示”に引き込むといった、連鎖参加型“演示”をトータルに実践する可変空間となる。

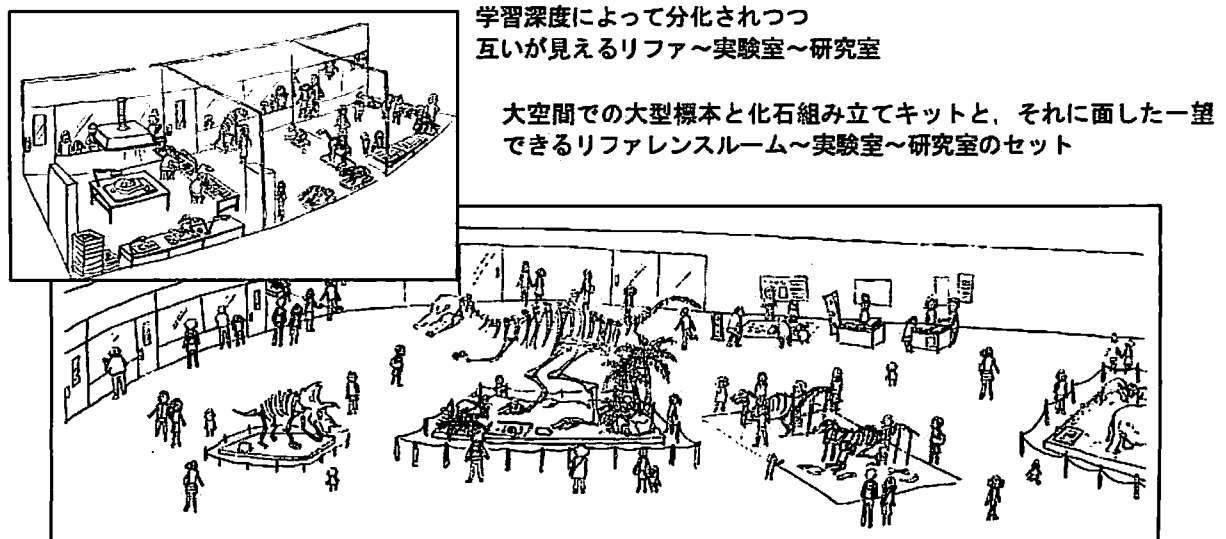


図3-6 驚きの交流空間と連鎖参加型“演示”のイメージ

	空間	誰が	何を	どのように	イメージ
I 恐竜復元	大空間	一般来館者が	実物大の模型 (化石・骨格など)を	巨大実物展示の周りの フリースペースで 遊びながら組み立て る	
	大空間に 面したギャ ラリー	関心層の一般来 館者～認証され た担い手～師範	認証毎にカテゴ リ分けされた 実物標本を	ホールから見える標 本室で認証レベルが わかるように(師範＝ 白衣着用?)	
	ギャラリー に面した個 室	担い手～師範	熟練を要する骨 格標本の組み 立てを	活動しているところを 関心層に眺めてもら う	
	大空間に 面したギャ ラリー	研究者が	資料と、資料の 整理・同定作業 を	ホールから見える実 験室で一般来館者に 眺めてもらう	
II キ ャ ラ バ ン	キャラバン パッケージ 制作室	関心層・担い手・ 師範と研究員が	キャラバンパッ ッケージ(展示ユ ニット)を	自らの調査結果を基 に工房で製作する	
	連携グル ープ・地域 研究員の 研究室	担い手・連携グ ループが	地域での調査 結果やプログラ ムのアイデアを	整理して発表、展示 化、プログラム化を 検討する	
	スーパーリ ファレンス ルーム	一般来館者～担 い手が	地域での調査 でわからなかつ たことや、展示 製作を充実させ るために	図書や標本を活用し ながら、自分達で内 容を充実させていく	
	オープン研 究室	研究員が	展示化する研 究活動を	立ち寄る師範や担い 手とコミュニケーション しながら進める	

図3-7 連鎖参加型の“演示”のアイデア

(2) 自ら学べる空間となりきり型“演示”

自ら学ぶ空間では、来館者自らが種や鳥になりきり、人間の身体感覚を超えた体験をすることによって、好奇心を強く喚起させる。または自然・環境の創造主となって、自らの行動によって自然・環境がどう変化するかシミュレーター (*12) で体験できる。




	空間	誰が	何を	どのように	イメージ
I シミュレーター	全天映像 シミュレーター	一般来館者が	100年後の日本の12ヶ月を	自分の選択による変化を実感する	
	ひょうごの空を飛ばう	一般来館者が	ひょうごの空を	鳥の視点で自由に飛びまわり、担い手が集めた情報を学習する	
II 現場体感	体感型空間 「体験！タネの気持ち」	一般来館者(子ども)が	なりきりカードを持って(タネの格好をして)	バーコードで自分の種類選択をしながら、落ち葉マットなどタネになりきるアトラクションで遊び、タネの視点で自然の様子や展示を体感	
	ツリークライミングで木登り	一般来館者が	木登り少年になって木を登りながら	木にいる昆虫や着生植物展示を発見、採取し、森の生態系を理解する	

図3-8 なりきり型の“演示”のアイデア

(3) 分かり合う空間と担い手実演型“演示”

屋内外の可変空間を用いた「分かり合う空間」は、担い手や自然・環境関連の民間企業、官公庁などの実践活動を屋台形式で“演示”し、来館者はもちろん“演示”者同士も分かり合う場となる。“演示”の内容は、自らの実践内容を「匠」になりきって実演し、来館者に体験を提供する、担い手実践型“演示”となる。



展示室を出ると広がる田んぼカフェ

田んぼの生態系の展示でもあり、環境教育の場でもある

企業や行政職員も含めた多様な担い手による屋台出展



図3-9 分かり合う空間と担い手実演型“演示”のイメージ

	空間	誰が	何を	どのように	イメージ
I ものづくり体験	標本づくり 専用の実験 室、標本用 屋台	担い手(サイエン ス・コラボレート・ ティーチャー≒ 理科助手)が	採種してきた昆 虫・植物などを	実演しながら昆虫 や植物のしくみに 気づいてもらう	
	専用の実験 室、標本用 屋台	担い手が	恐竜や貝の化石 レプリカを	展示や実物(標本 棚)を見ながらつ くる	
II 現場体験	隣接した樹 林	担い手が	樹林の葉っぱ、草 本植物などを	調査丸ごと体験し てもらい、自立的 な学習に誘う	
	展示室に面 した田んぼ	担い手や農業改 良普及員が	農作物と生き物を	農業体験を通して 見つけ考えてもら う	
	新館屋上	担い手や宝塚の 造園業者が	郷土種による屋 上・壁面・吊り緑 化の仕方を	寄ってくる蝶など の説明もくわえな がら実演	

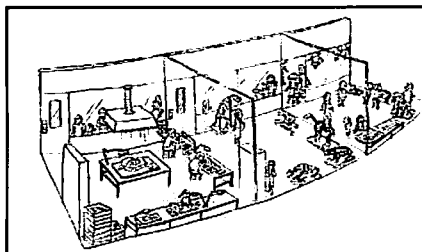
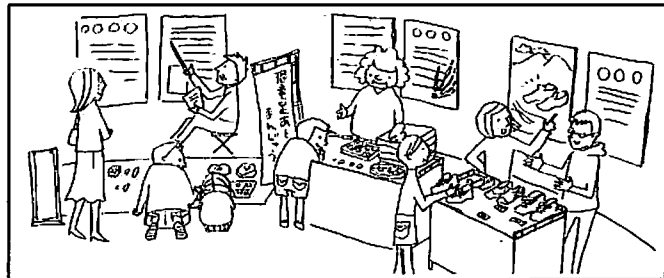
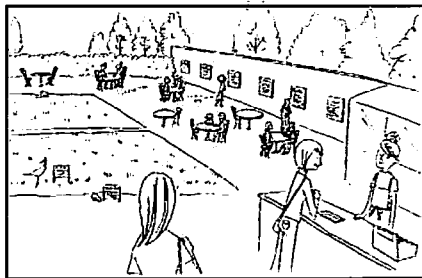
図3-10 なりきり型の“演示”のアイデア

(4) “演示”の中身になる博物館活動のプログラム例と空間の対応

上記の「連鎖参加型“演示”」「なりきり型“演示”」「担い手実演型“演示”」は、新しいひとはくが支援する生涯学習プログラムが、一方では来館者サービスとして展開されるものである。ひとはく大学院入学者またはひとはく生涯学習院参加者は、県下各地域での調査、遊び、キャラバン等の博物館活動にレベル毎に参画し、そのプロセスまたは結果をひとはくにて学習プログラムとして提供することとなる。

生涯学習プログラム					“演示”
地域	プロジェクト	調査	処理・解析	制作	発表
但馬	ヒメボタル分布調査	野外調査（トラップ）		GIS 分布情報	デ モ ン ス ト レ ー シ ョ ン
丹波	シカの食害防止	野外調査（森林、糞）	糞、胃内容物、解剖	骨格標本、GIS 分布情報	
阪神北	サイ化石発掘	野外調査（地層）	クリーニング、部位特定	レプリカ制作	
阪神南	プレイパークづくり	ワークショップ	検討図面、模型製作	模型製作、公園づくり	
神戸	六甲山現存植生調査	野外調査（コドラート）	同定		

新しいひとはくでの
デモンストレーション



左上：屋外での実演（演示）を他の来館者が楽しむ
上：舞台上での成果発表（演示）を他の来館者が楽しむ
左：先輩を見習いながらの実演（演示）を他の来館者が楽しむ

図3-11 “演示”の中身になる博物館活動のプログラム例と空間の対応

3-3 本館と新館の機能

これまでのひとはくは、高い専門知識と地域での実践力を持った「師範」と、関心を持ってセミナーなど博物館事業に参加する「関心層」に、博物館の持つ情報を伝達してきた。この機能を継承しつつ、リニューアル後には、研究員と共に学習プログラムを来館者や地域住民に提供する「担い手」の養成と、担い手との協働による「無関心層」の掘り起こしに重点をおく。

ひとはく本館では、従来の「師範」「関心層」へのサービスを提供しつつ、兵庫県の基本的な自然・環境情報の伝達に努める。新しいひとはくで実践する「無関心層」と「担い手」へのサービスは、新館にて人材養成と“演示”および驚きの展示空間を提供し、それを全県展開する。

2館がそれぞれの機能を果たすことで、「いつでもどこでも誰でも」学習できる機会を全階層の県民に提供する。この両館をつなぐ要として、大学院教育や資料収集活動、シンクタンク活動といった知的インフラ機能がある。

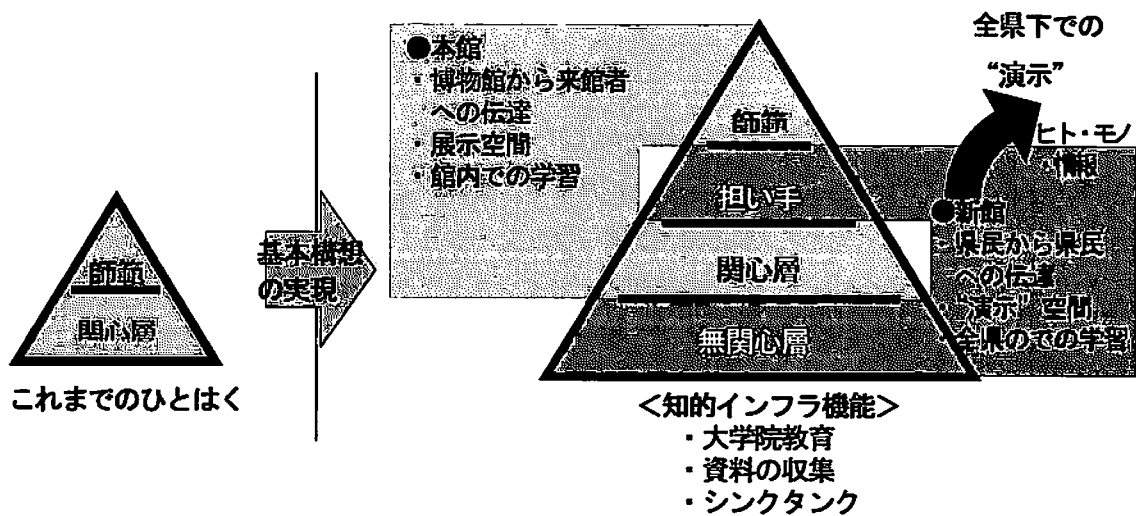


図3-12 本館と新館の機能区分

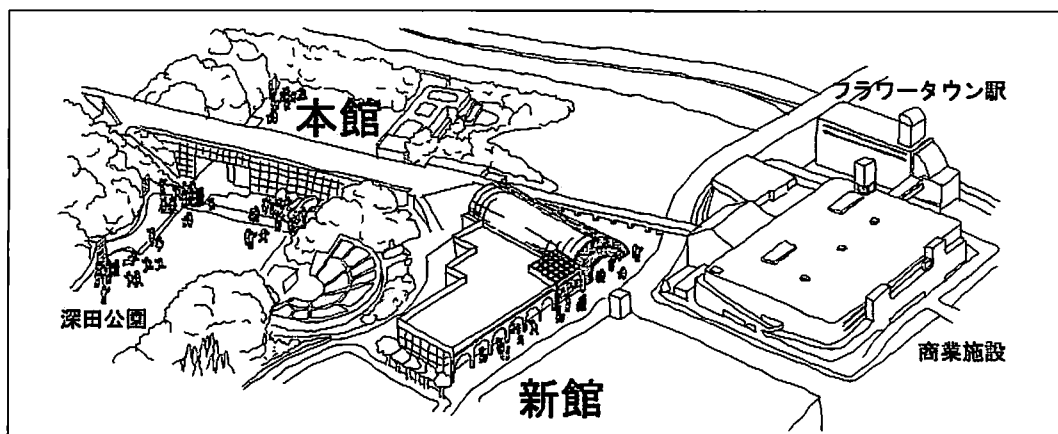


図3-13 本館と新館の敷地構成

第4章 運営計画

4-1 運営の基本方針

(1) 利用者と博物館の関係

■担い手との協働による利用者とのコミュニケーション

これまでの博物館では、利用者は博物館が提供する展示を見たり講座を受けたりするサービスの受け手と位置づけられ、多くの場合利用者と博物館の関係は一方的で浅いレベルにとどまっていた。それに対して、新しいひとはくは、県民がひとはくの利用者として、博物館の提供する各種のハード・ソフトからなる資源を、自分に合ったプログラムとして使いこなし、さらにはひとはくの活動に参加することをめざす。つまり利用者と博物館の関係は双方向的で深いレベルに達する必要がある。そのために、博物館は新しいインタフェースを備えることが求められる。それは、ハードのみ、ソフトのみのいずれかではなく、ハード・ソフトが一体化したプログラムと、それに加え、これまでなかった「担い手」の存在によってはじめて可能になる。この担い手は、ひとはく生涯学習院において育つことになる。

■総合的な人間インタフェース

研究者および担い手は、利用者に対する仲立ち（ボンディング、ブリッジング）役を担うことによって、利用者とひとはくのコミュニケーションを促進する。具体的には利用者との対話を通じて、コンサルティング、学習のプランニング、展示のインタープリテーション、ワークショップのファシリテーション、レファレンスのガイダンス、制作やデザインのインストラクション等をおこなう。利用者とひとはくのコミュニケーションを促進するために、担い手と研究員との密接な協働が不可欠であることはいうまでもない。

ひとはく職員は56人。県民は560万人。1人の研究員が10万人を相手せねばならない。（岩槻邦男委員）

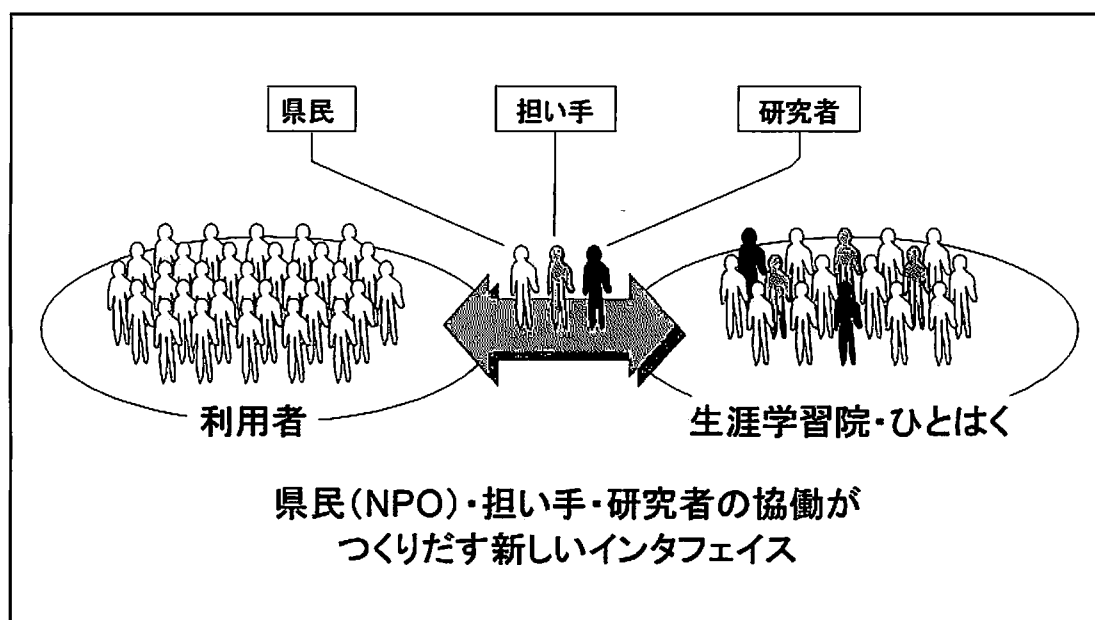


図4-1 県民と専門家とのコミュニケーション

(2) 県民が運営に参画する-県民の共同利用機関としての運営のしくみ

新しいひとはくは、県民、NPO、団体、企業、行政等とのパートナーシップのもと、県内外の各種施設との関係によって形成される開放系ネットワークであり、県民の共同利用機動的な性格をもつことになる。したがって、その円滑な運営、つまりステークホルダー間の調整を図り、オープンな協働を促進するために、県民（ひとはく生涯学習院士）が運営に参画するしくみを構築する必要がある。こうしたしくみは、組織運営の透明性を高め説明責任を果たすことにも寄与する。

行政はそれぞれのセクションをしっかり管理してくれるので、全体をつなぐのは同じ県の機関であるひとはくが担えばいい。(日高敏隆委員)

(3) 県民の展望塔の役割を果たす地域のシンクタンクとしてのしくみ

新しいひとはくが地域のシンクタンクとして地域課題解決に寄与するためには、さまざまな課題に対応できる柔軟で効果的な調査研究体制が必要である。その基本は、目標を明確化した時限的なプロジェクト方式とし、他機関、企業、行政等との連携によって外部の専門家を加えたタスクフォースによって実施することとする。これらの調査研究プロジェクトは、生涯学習院のさまざまな活動と密接に関係するものであり、生涯学習院士および生涯学習院生がプロジェクトチーム（および各運営部門）に参画することになる。複数の運営部門・複数のプロジェクトを適切に管理し最適化を図るために、部門をまたいだCOO（Chief operating officer: 最高執行責任者）をおくこととする。

組織を構成する人材についても、専門バカの集まりではなく融通性を持った専門家集団であることが求められる。(鳴海邦碩委員)

いろいろなフィールドを研究の対象にして、それぞれの成果を分野横断的に検討できるような研究機関になっていただきたい。ひとはくは、分野横断的に議論することのできる場であるということを提案すべきだろう。(上野祐子委員)

一般論だけで話を展開すると具体的なことがわからなくなってしまう。逆に個別のことは学問として成り立たない。本当は、この2つをつなげる必要がある。(日高敏隆委員)

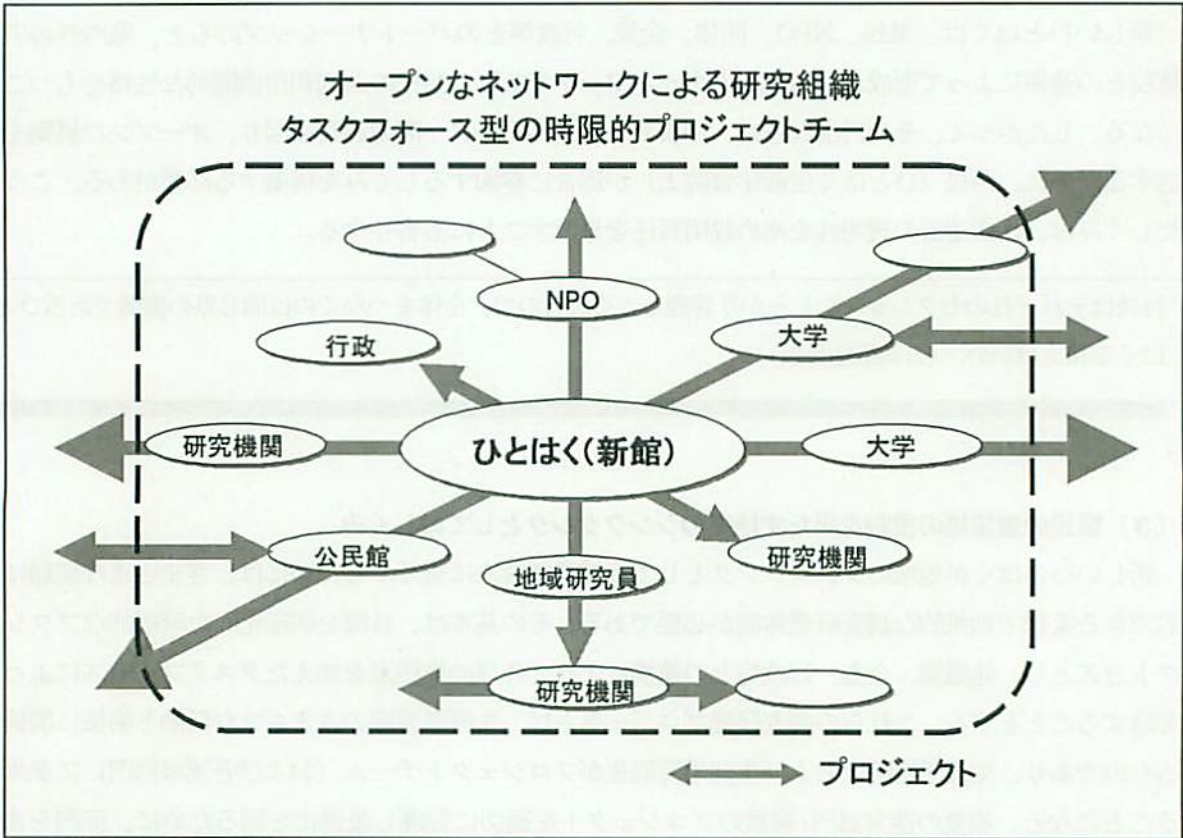


図4-2 ネットワーク型研究組織

1 広版

博物館がキャンパス

**「人と自然」に
県立大大学院**

07年春 資料70万点活用

県立大は、今年春、新館（新館）に「人と自然」をテーマとする「人と自然」学部の設置を発表した。新館は、今年春、新館（新館）に「人と自然」学部の設置を発表した。新館は、今年春、新館（新館）に「人と自然」学部の設置を発表した。

県立大は、今年春、新館（新館）に「人と自然」学部の設置を発表した。新館は、今年春、新館（新館）に「人と自然」学部の設置を発表した。

誕生40年 オールド・ニュータウン

「明舞」再生 広場で一歩

センター1階 催し会場に

市民らセレモニー

「明舞」再生センター1階の催し会場に、市民らセレモニーが実施された。この日のオープニングセレモニーには、市長をはじめ、関係者約50人が参加し、明舞再生センターの再生事業に賛意を示した。

この日のオープニングセレモニーには、市長をはじめ、関係者約50人が参加し、明舞再生センターの再生事業に賛意を示した。

参考 神戸新聞：まちづくり広場事業で公民館が展示空間に

参考 神戸新聞：ひとはくに県立大大学院設置

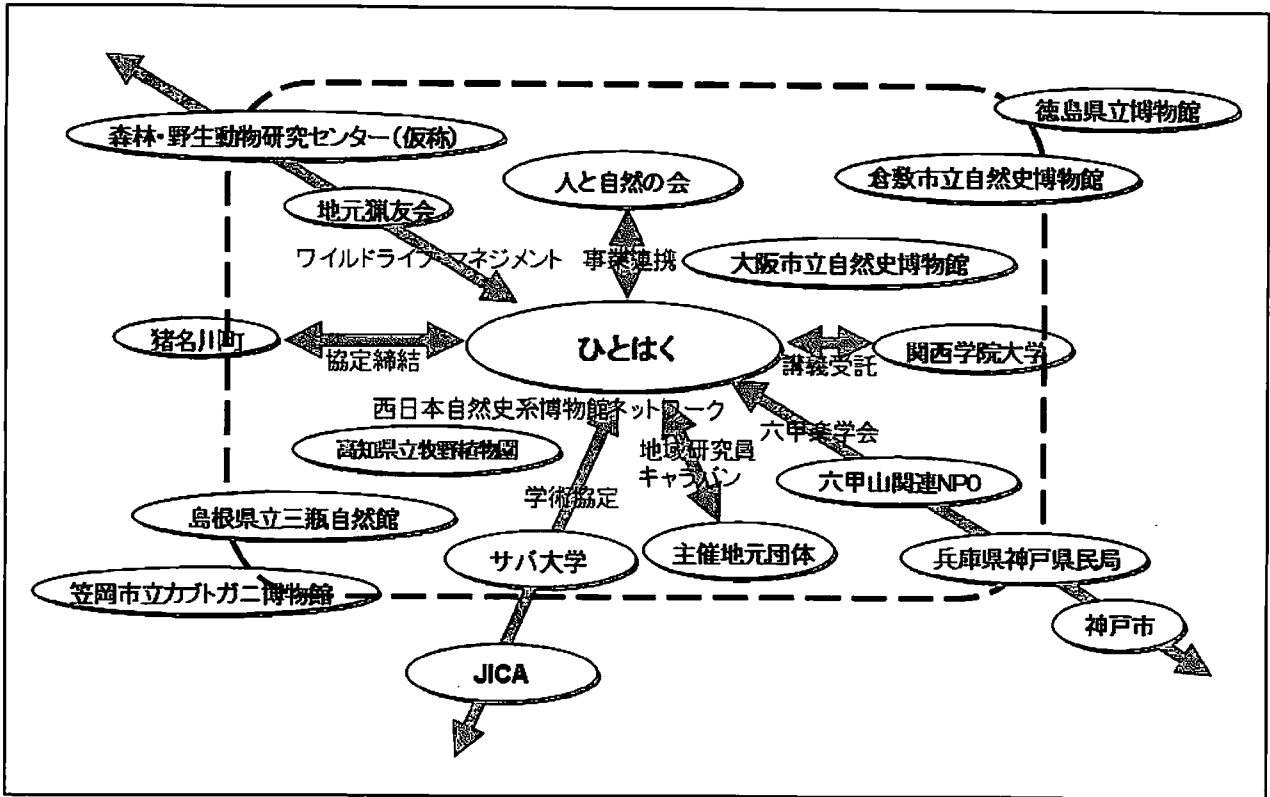


図4-3 現在のオープンなネットワーク (一例)

(4) 柔軟な運営のためのしくみ

■民間活力の導入とマネジメント体制

効果的効率的な運営を図るため、民間的な発想を積極的に取り入れ、会社経営的な財務システムや市場調査やPR活動等を含めた経営感覚をもったマネジメント体制を構築する。

■柔軟な組織形態

組織についても、同様に民間における社内カンパニーなどを参考に、部門ごとに最適な運営形態を検討し、組織全体の最適化を図る。特に、施設・設備の維持管理等については、アウトソーシングや指定管理者制度など現時点で適用可能な制度的枠組を活用するとともに、将来的には独立行政法人化など現時点では未整備の制度的枠組にも目配りする。

■資金の獲得

各部門の運営に当たっては、冠展示や寄付講座など企業等からの直接・間接の支援獲得の受け皿を整備するなど外部資金の導入に努める

4-2 組織のあり方

(1) 全体組織

■担い手の参画

新しいひとはくの組織は、生涯学習院（生）と密接に関係した組織形態とする。担い手となった生涯学習院士は、交流学習企画部門・担い手学習部門・資料展示学習部門・シンクタンク部門の4事業部門に運営スタッフとしても参加し、地域研究からプログラム、展示、交流連携が一体となった生涯学習院事業を運営面からも担う。こうした方式の採用により学習品質や運営効率が低下しない仕組みを構築する。

■生涯学習事業と対応した柔軟な事業部門編成

交流・連携→分かり合うプログラム→資料の活用・展示作り→地域研究といった流れを持つ生涯学習院事業と対応する4つの部門、交流学習企画部門・担い手学習部門・資料展示学習部門・シンクタンク部門を設ける。部門間の関係は、経営戦略と担い手の参画状況によって各部門の事業規模や人材配置を年度ごとに検討する柔軟な形態を採用する。

各部門は生涯学習院生と研究員・外部との連携によるプロジェクトベースで運営されるが、国・自治体・企業・NPOなど外部組織からの社会要請についても経営部門がとりまとめ、プロジェクト化・生涯学習院事業化を行う。

■参画型フラット組織を支える経営

全体の経営戦略を支える館長・副館長および経営戦略会議を設置し、担い手が参加する故の明確な責任体制と、効果的・効率的な組織経営を行う。

各部門に部門長はおかず、部門間の調整を含めた指揮をとるCOO（Chief Operating Officer:最高執行責任者）を複数名おいて、参画型フラット組織の円滑な運営をおこなう。このような体制をとること

により、生涯学習院生に対しては各部門が機能し、社会的な要請・県民の要請にたいしては、プロジェクトが部門横断的に機能することができるという柔軟な組織が実現する。

(2) 各部門の機能

■経営部門

本部門は、マネジメントとして、行政組織との調整、外部資金の獲得、生涯学習院事業全体の経営計画立案・評価を行う。またマーケティングとして、潜在的利用者や生涯学習院生を対象とした市場調査、各種メディアや関係生涯学習施設などへの広報の実務をおこなう。これら事業以外の経営活動も専門知識や事業ノウハウを持つ研究員が行うことによって、資源・人材を効果的・効率的に活用した生涯学習事業の経営を目指す。

【求められる職能（研究員が担う役割）】

財務管理者、マーケティングディレクター、広報官

■シンクタンク部門

本部門は、新館を中心とした生涯学習を通して担い手自らが解決すべき社会的な課題をみだし、OJT（体験を通じた学び）による生涯学習型地域研究＝プロジェクトを進める総合的支援を行う。全研究員が様々なプロジェクトにスタッフとして参加し、他館・他大学と学術面で連携しながら、担い手とともに地域のシンクタンクとなるべく活動する。他機関等との連携を推進するためには、COO（最高執行責任者）との連携の下、プロジェクトの責任者がプロジェクトにかかる意思決定を担う必要があり、リサーチ・ディレクターを置き必要な仕組みを整備することとする。

【求められる職能（研究員が担う役割）】

リサーチ・ディレクター

■資料・展示学習部門

本部門は、担い手が既存収蔵資料や自然・環境情報、プロジェクトによって収拾された人と自然の関わりに関する資料・情報などを整理し、展示物として利用者や地域に提供するまでを支援する。専門知識を持った研究員が学術・技術指導や展示化の支援を行い、生涯学習院生と共に人と自然の関係を発信する新しい資料・展示を開発する。

【求められる職能（研究員が担う役割）】

アートディレクター、プロダクト（展示物）デザイナー、フロアマネージャー、キュレーター

■担い手学習部門

本部門は、展示や施設を活用したプログラム、展示物のインタープリテーション、学習素材の開発、団体受け入れなど、様々な生涯学習プログラムの企画・運営をおこなう。ここは生涯学習院の博物館活動に関するOJT（体験を通じた学び）と利用者サービスを融合させる役割も担うことから、分かり合う学習の基盤となる部門である。

【求められる職能（研究員が担う役割）】

インタープリター、サイエンス・コミュニケーター、学習プランナーなど

■交流学習企画部門

本部門は、生涯学習院に関わる利用者・企業・行政・NPOが交流し、新しい生涯学習の機会を生み出すために、交流の場の開発・提供やファシリテーションなどソフト支援を行う。また自然や環境に関心のない利用者の関心を高めるために、担い手が入口となったガイダンスや驚き展示の演出を担う。

【求められる職能（研究員が担う役割）】

イベント・コーディネーター、ワークショップ・ファシリテーター、コミュニケーター

(3) プロジェクト

シンクタンク部門が担うOJT（体験を通じた学び）による生涯学習型地域研究＝プロジェクトは、生涯学習院で行う地域研究を他館・他大学と連携しつつ行い、その成果を各部門で活用することを視野に入れながら行う総合的なシンクタンク活動である。たとえば、ある河川の自然再生プロジェクトを立ち上げれば、流域全体の自然環境ポテンシャルの測定と実現方策の提案を生涯学習院生と研究員との協働で行い（シンクタンク部門）、その成果をユニット展示にし（資料・展示学習部門と連携）、現地でのキャラバン事業やワークショップ・セミナーを企画し（担い手学習部門と連携）、地域で活動する様々な団体と交流すること（交流学習企画部門と連携）を一体的に行うこととなる。

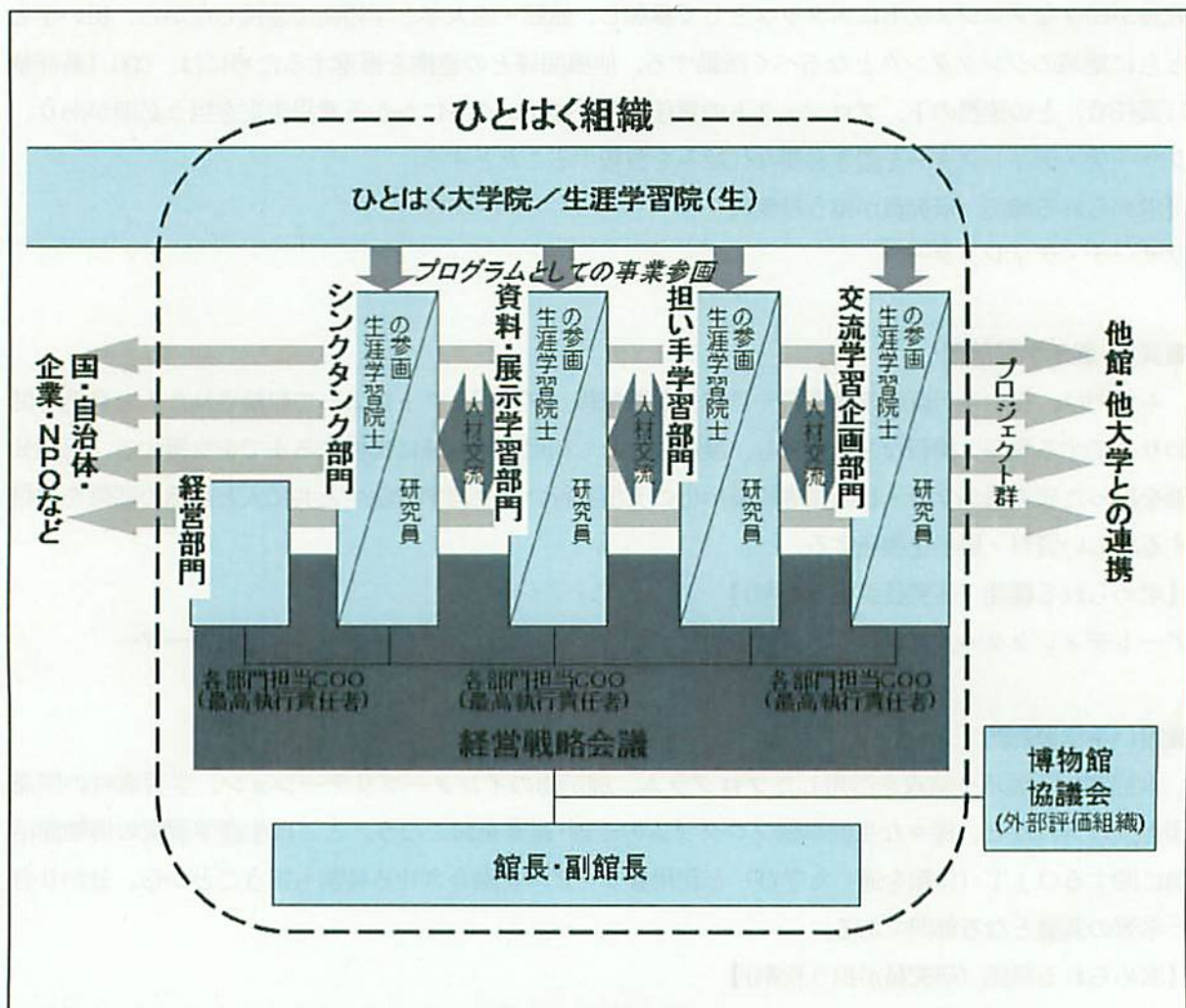


図4-4 組織イメージ

4-3 組織移行の考え方

研究員が全部門のとりまとめや技術指導を行うため、ひとはく生涯学習院の組織はH22年の新館完成とともに動き出すことができる。H17年度～H21年度は地域研究員の養成やタスクフォース型のプロジェクトの試行を通じた段階的移行期になり、H19年に設置予定の兵庫県立大学環境人間学研究科・多様性戦略コース（仮称）の併設もあわせて多様な生涯学習の機会を創出する。H22年度以降は生涯学習院の実践による参画県民の増加にあわせて部門の拡大と再編検討を行う。また、条例改正などによって博物館に独立大学院を設置し、組織全体が社会教育施設から大学院まで含んだ生涯学習機関として機能することを目標とする。

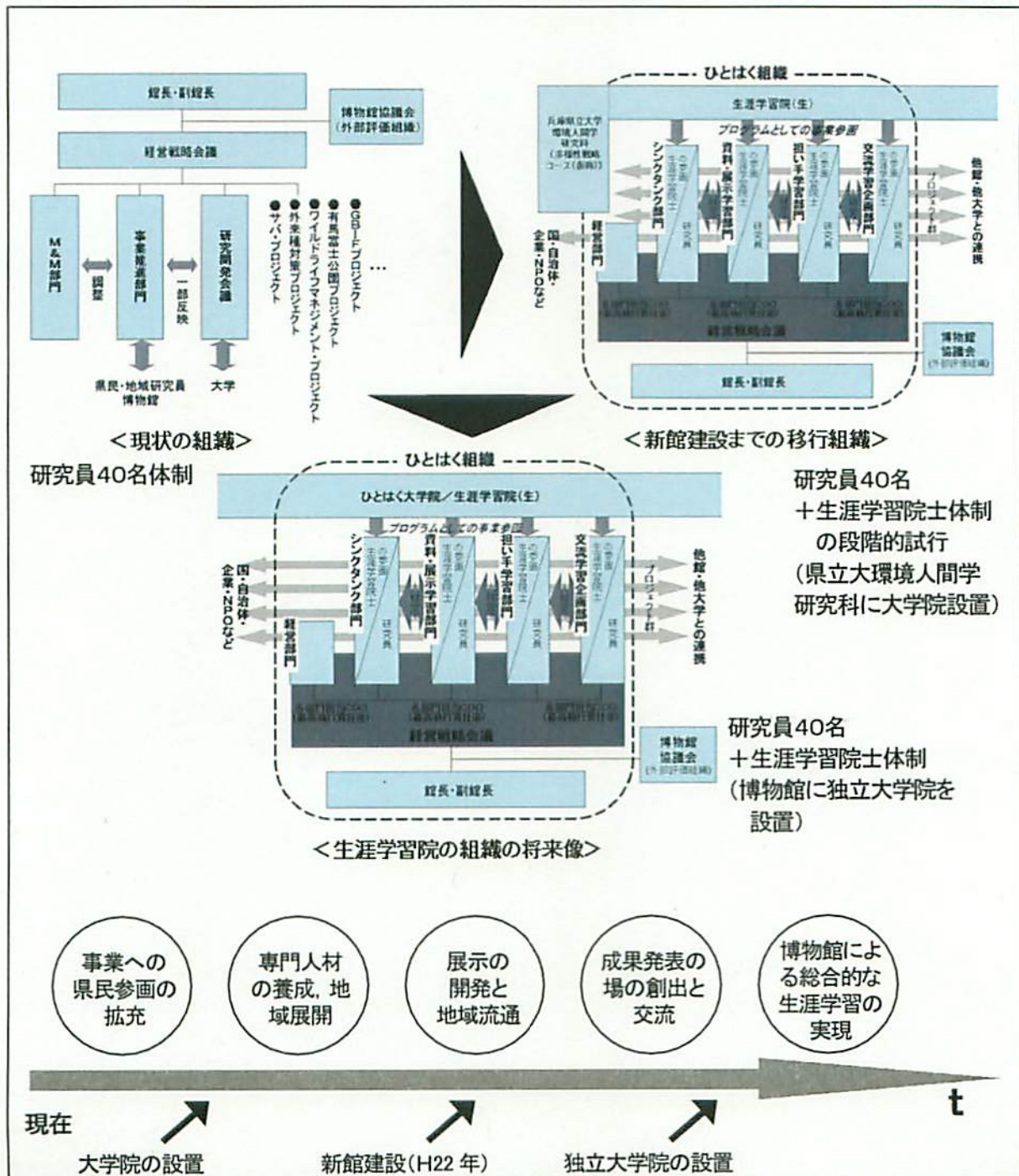


図4-5 組織移行の考え方

第5章 構想の実現に向けて

本構想の実現に当たっては、本構想に基づき基本計画を策定するとともに、具体的な達成目標を設定し、情勢の変化を踏まえて適宜見直しを実施する。5年ごとに策定する中期目標は本構想と連動させ、定期的な博物館機能の見直しや、年度ごとの事業計画への反映を図る。

本構想はハード・ソフト両面にわたるため、基本計画策定にあたっては、分野に分けて十分に検討し計画を策定する必要がある。その際、演示の内容となるプログラムについては、現実の博物館活動の中で試行的に実施し、年度ごとの事業計画で達成目標を設定するなど、ソフト先行で進めることとする。同時に、演示はハード・ソフト一体になって初めて可能になるものであり、新館建設は本構想実現のための不可欠な条件であることから、ソフト面の検討と平行してハード面をより具体化するための検討を進めていく。

参考資料

1 兵庫県立人と自然の博物館 基本構想策定委員会 委員名簿

氏名	所属	専門
三浦 朱門*1	日本芸術院, 元文化庁長官	文化, 教育
野上 智行*2	神戸大学学長	科学教育, 生涯学習
上野 祐子	(株) マーケティングダイナミクス研究所代表取締役	マーケティング
岡田 眞美子	兵庫県立大学環境人間学部教授	文化, 環境
角野 幸博	関西学院大学教授	集客・施設計画
高原 浩之	(株) HTAデザイン事務所代表取締役	建築設計
鳴海 邦碩	大阪大学大学院教授	都市計画, まちづくり
日高 敏隆	大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 総合地球環境学研究所所長	動物学
福島 祥行	大阪市立大学大学院助教授, 浪花グランドロマン主宰	フランス言語学, 演劇 コミュニケーション
岩槻 邦男	県立人と自然の博物館館長	植物学, 生涯学習
山内 康弘	兵庫県教育委員会事務局教育次長	社会教育

*1 : 委員長 *2 : 副委員長

2 委員会の審議経過

回	開催日	場所	審議内容
1	平成17年6月29日	人と自然の博物館	二十一世紀における博物館の方向性とひとはくのコネクト
2	平成17年8月19日	兵庫県立美術館	ひとはくの展示と学習プログラム
3	平成17年9月28日	国立科学博物館	博物館マネジメント
4	平成17年12月6日	人と自然の博物館	中間取りまとめ
5	平成18年8月4日	人と自然の博物館	演示と施設のあり方
6	平成19年1月30日	ひょうご女性交流館	最終取りまとめ

3 用語集

用語	意味
ITリテラシー	ITに関わる人間の資質や能力を示す概念。
OJT	企業内で行われる職業指導手法の一つで、職場の上司や先輩が部下や後輩に対し、具体的な仕事を通じて、仕事に必要な知識・技術・技能・態度などを、意図的・計画的・継続的に指導し、修得させることによって、全体的な業務処理能力や力量を育成するすべての活動である。
PFI	公共サービスの提供に際して公共施設が必要な場合に、従来のように公共が直接施設を整備せずに、民間資金を利用して民間に施設整備と公共サービスの提供をゆだねる手法。
VE	工業製品や役務(サービス)の製造・提供コストあたりの価値(機能・性能・満足度など)を最大にしようという体系的手法。
アウトカム	サービスの供給側からではなく受け手から見た成果。
アウトソーシング	外注(がいちゅう)、外製(がいせい)ともいい、企業や行政の業務のうち専門的なものについて、それをより得意とする外部の企業等に委託すること。
アダプティブマネジメント	不確実性を伴う対象を取り扱うための考え方・システムで、特に野生生物や生態系の保護管理に用いられる。適応的管理と言われる場合もある。
インタープリター	自然観察、自然体験などの活動を通して、自然を保護する心を育て、自然にやさしい生活の実践を促すため、自然が発する様々な言葉を人間の言葉に翻訳して伝える人をいう。
インタフェイス	コンピュータで異なる装置同士、または装置と操作者を仲介するための装置や、ソフトウェアにおける操作体系をさす。
キャラバン事業	県下各地において地元との協働によって調査・資料収集・展示・セミナー等のミニ博物館とでもいうべき活動を実施する事業。
キュレーター	美術館等の学芸員。
グランドビジョン	最終的な将来像。
グリーン化	環境に配慮したものに変えること。
コミュニティシンクタンク	地域や生活の現場に根ざして、生活者の視点、納税者の視点、社会的弱者の視点、地域コミュニティ再生の視点から、住民の生の声、地域内外の英知や専門知を総合編集して、地域の問題・課題を解決する政策形成力をもったシンクタンク。
コミュニティビジネス	地域の市民が主体となり、地域の資源を活用して、地域の抱える課題をビジネス的手法で解決し、コミュニティの再生を通じて、その活動で得た利益を地域に還元すること。地域の活性化や新しい雇用の創出などの面から近年脚光を浴びている。経営主体も有限会社、NPO法人、協同組合などさまざまである。
サイエンス・コミュニケーター	高度で細分化していく科学技術と一般社会とをつなぐ役割を担う人。
ジーンバンク	多くの生物資源を将来のために遺伝子レベルで保存しておくもので、植物の種子を保存しておくシードバンク(種子銀行)もその一つ。
ジーンファーム	野生植物の保護・増殖のために人と自然の博物館に設置された圃場。

用語	意味
ステークホルダー	企業・行政・NPO等の行動に直接・間接的に関係する者を指す。また、日本語では利害関係者という。
セーフティネット	一部での故障や破綻がシステムや社会全体に波及するのを防ぐ安全装置。
ソフト化	経済のなかで、知識集約型の産業やサービス業の比重が高まり、製品についても、ファッション性が高まったり、多様な形態をとって知識やサービスの要素が重要になっていくこと。
タスクフォース	特別の作業を担当するために置かれた班。
パートナーシップ	協力関係。
ヒューマンケア	保健・医療・福祉に関する専門的な働きかけを必要とする人が、その問題を主体的に解決し、より良く生きることを目的とした援助を行うこと。
ポテンシャル	潜在的な能力。
マネジメント	科学的に管理すること。
ミュージアムサービス	博物館における来館者に対するサービス。
ライフステージ	出生から、学校卒業、就職、結婚、出産、子育て、リタイアなどの人生の節目によって変わる生活(ライフサイクル)に着目した区分。
リ・デザイン	再設計にあたり変革すること。
リカレント教育	学校教育を終了した社会人や職業人が、いつでも必要に応じて職場や家庭から学習の場に戻って、生涯にわたって繰り返し学習すること。
リサーチプロジェクト	広く県民の参画と協働を通じて調査を実施する形式の人と自然の博物館における調査事業。
レッドデータブック	絶滅のおそれのある野生生物について記載したデータブック。RDBと略す。
ワークシェアリング	雇用を確保するために、一つの仕事を多数で分け合うという考え方、および政策のこと。
ワークショップ	ファシリテーターと呼ばれる司会進行役の人が、参加者が自発的に作業をする環境を整え、参加者全員が体験するものとして運営されることがポピュラーな方法である。
ワイルドライフマネジメント	科学的・計画的な野生鳥獣の保護管理。
環境リテラシー	リテラシーには、そもそも「読み書き能力」「教養があること」といった意味があり、環境リテラシーとは環境に関わる人間の資質や能力を示す概念。
照葉樹林	常緑の広葉樹が優占する森林。優占する樹種によりシイ林、カシ林、タブ林などと呼ばれることもある。
新しい公	個人や団体が地域社会で行うボランティア活動やNPO活動など、互いに支え合う互惠の精神に基づき、利潤追求を目的とせず、社会的課題の解決に貢献する活動が、従来の『官』と『民』という二分法では捉えきれない公共性をもつことをいう。

用語	意味
多文化共生	様々な国・民族の出身者が、それぞれが背景にもつ自分たちの「文化」を大切にしながら社会に参加することで社会全体をより豊かにしていこうという考え方。
地域研究員	ひとはくと協働して調査・資料収集・展示・セミナー等の博物館事業を実施する人に対する呼称。
里地里山	都市域と原生的自然との中間に位置し、人間の働きかけを通じて環境が形成されてきた地域のこと。集落をとりまく二次林と農地、ため池、草原などで構成され、日本の国土の4割程度を占めている。
連携団体	ひとはくと連携して調査・資料収集・展示・セミナー等の博物館事業を実施する団体。